[illegible]

12
881
49

早稲田大學圖書

橋姫　宇治十帖之一

巻の名以哥号せる也　橋姫の心をくみて高瀬さす
棹の雫に袖ぞぬれぬる　此巻は薫十九歳より廿
一歳までの事あり又花世は薫十六歳より十八歳まで
或る年中の跡つゞき不審なし文宇治十帖をとも云よ
ひと業式部の娘大弐三位のそへしとも云り信難用
むかし花子は大略三位の筆よりも同じくしるやうに見えてたり
さまれは班彪の史記を書さして其子班固の書
継たるに相似たりと遊のはら花去師説八紫式部
の同筆にて見る人をもあるまし又紫梅何河は橋姫椎本
友連は混乱せるも也文体は時代のうつるに任すと云る説や
此巻は紫梅よりもさきの事也未た見え此巻子も薫
宰相中将とあり十九歳の時なるへし薫宇治八宮へ参

ませ給ひけるまつりことに三年をへ給ふとき又おりまて秋の末より
宇治へ来給ひて又十月に来給ひて何事も此里に住まれ給ふに
八宮の幼かれ時よりのゆかりと云ふことも有らは是に此宮の御方
なりとも(?)おほきに出家させ給ひしによりて八宮の御
事なるへししめんか為なるへし　又何みや一名優婆塞と
云ふ又橋姫の清濁の事　問云　ひめのひの字濁て
読み二注をも見及ぬると云　花或抄ニ云　此物語始め桐壺
よりも終の夢浮橋まて五十四帖なりて或人出家する
中と云ふ或人の申侍るは宇治十帖は紫の女の大弐三位書
つき侍りしかとも(?)ことに班彪か史記と云
ものをむすめ(?)子班固か書次年なるに相似たるへし　大弐
三位は右衛門佐宣孝か女也〔大弐三位か名也〕賢子後一条院御乳母叙
三位也　抑応神天皇とは宇佐宮八幡大菩薩なれ

もうけまします其の御子のうちに大鷦鷯の尊と申すは
弟を菟道稚郎子と申ありて父帝は宇治の御子をことにいとほしみ
子をいつくしみまして東宮に立せ給ひしか程なく
天皇崩御ありしまゝに兄の東宮位に付給はす
兄をさしおきて我八位につき給はん太子さ
さきの御代にはやく位につき給へとや給ひけると我
は二の御子にて宇治の御子にと先位につき給へとも物語(?)しめ
されて互に太子をゆつり給ひあらそひて三年の
はるかに送り給ふ程に難波におはしまし
まとり又宇治の御子に申(?)こそ宇治にまします
給ひし程に此御子の貢物をもちて宇治に来れ
我は天皇にあらすとて難波へとて来れより
難波へ来れは宇治へまて来りと給ひて何ちに給も

てある御かたもきこえんじ常にわたり給ふをめくとの給ふ
ら神功皇后おはしけるかくて三年と云事なりしに
うちわらこの給ひて我この王子の心さしをもふかく
きえしおもひさせて天下をゆつりたまはんとてことに
おはしますらく君給はなれたまはしめしのかんと宇治
て難波よりをも急ぎ給はしまして我もとも宇治
まへ出ましたちかへり給へとさそいおなしくも給へと揺りかへて
うけしい給はなれたまひわうこいさくりつけておさゐ
給ふに行くを是は天命をうけをは何をか申べきて
とくまかんとて給ふて又揺り出て給ふともおほせ給ふ
なれもたまへの御子そくり尊服してうへしひ給ひて
宇治の山ずちらびさみ高き給へて坂なんたさくさき
是を給り位に津の給ひけるを仁徳天皇と申

なり宇治と云は山城国の郡の名也やうて里さかとう
ともいふ也是を宮まる名あふれて神功皇后の御母
の名たち桐壺也田上ろく宇治に年経つとよめるも此
名に侍るによりて宇治とこそかゝるや今ゆゑ
読の宇治のうた拾へれてと中へ桐壺の巻の此中の八の宮
も御母ハ左大臣の女とかゝれたりそれ御ハ仁とも是又
院帝十の御子也東宮にまうけ給へし時朱雀院の母后大
后とや御心ましく思ひて此后我か孫の東宮をと冷泉院に
世をうばはれ給てるを御心へなれ給ひにもことしてせめて此
ひと思ひしに此八宮をとりたてゝとてうつたへ給へきてうか
ゝ給ふ六条院の御かたかむるひかりたまへ給ひて世をそむ
きたまひて其後よりは六条院ともに此八宮はおなし
しきみ給へ給へまたしそのへ中へよるゝさまふかく年月

とよみたるに京の御方さまへやまさりしを宇治と云るよ
しある山里也有常に住ひ給へる宇治の優婆
塞の宮と八の宮を申す也 若此宇治よりこそとこに住
ゐつりて宇治の山里に給へり 此八宮は法にたとへて
まふ宮をとこそまして宇治にうつろひ給ふ事なとありやう
なれとその頃はとともなくして世をうち山にすみとの
き給ふそれ阿闍梨相ありてへとまに見えまつるのかれすまれハ
くるしく宇治の山里とハ住給ひ給ふ也と
其所にかへるまへりて世給ひぬ事をりしと
花八宇治の優婆塞宮の御事也 桐壺帝の八番めの御
子也 源氏の君の御舎弟なり 冷泉院ハ十番めの御子
なり 又此宮を優婆塞宮と号す 河海抄の説
なり 此上不用 優婆塞の宮の母ハ左大臣の女也

花 又此とへ此巻の時分と見て見る人あとともや此巻に
薫中将の宇治にまうて給へることを云て宰相中将と
云侍り又紅梅のおとゝとも按察大納言とのせ侍り先にて
見侍る時ハ薫の十六歳此時ある人しるさは按察
の宇治へうつり給ふもまうて侍ると云はゝ法を
まうて給ひぬと八桐壺の御つの御子にて此枝よりもそへれ
給ふぬ也と云也
さくかむことやむことなき御子にておはしますと
ゆしかととおほしまさる御
八宮の御母ハ女御也 又八左大臣
雑なとも申すもちてと申すとハ八宮の御ことを云官めと云給へ
さ給ふまし有しても御ゆかりの東宮にまゐり給ふなとの
またハ源氏と悪后と御中そよかしく
冷泉院を東宮にまゐり立給ましけるて此八宮をと朱雀

院へ移り給へきにもあらねとおほしめして給ひける事よ源氏
とも冷泉院とも八実は御中何となくなれかしとくに
如給ひしかあれ后ゆへも我御腹の御子なくはおはしまさねとも
源氏よりはおほく給へんとて八宮をもまいらせ給ふと也源氏
八実とまうすも冷泉院八(ニン)実(ジツ)八我御子なれは只東宮に同心
し給へとも八句縁の義也生得(シヤウトク)八八宮と源氏とは御中よから
ぬなりしをおもし后よそにあらせ給ひてそむくし給もな
かる給ふへし　花　すちことなる人なれは一流(ヒトツナカレ)とてまた
かはりて相続(サウゾク)せらるへきやうなるまたあるましき事なれはまて
有しと也
時うつりては世中にたゝしき女御なとも世はまことにおほえけり
東宮の御事ありし后なとともまゐらせ給ひしかはとてよろつ
にて冷泉院へ此世の事なれと時うつりて世中よろつ大かたへ八八さりし

女御なとも参り給ふなるへし　花　六条院とうへおなしく此宮を
御中そむくし給はるゝといふ也まして女八本(ホンハラ)腹の御事也　此
年ころ紀と八物の心えしくしくありけるすへにはといふへし
かくれまつりて世ぬと云る也
中くいとおもほしをなくはしろまことをのかしめしなん御ちく
みくのくらくは清まさく　此宮八宮ま御ことのうつきまと
ましまきをはつりやあくまとかせてはつとおもしる
つととも有しの心也
世をそむき給ふにおはしまへしにもまてはれなくおはしまへて
あさまし給つるやうなり　花　宮の御事心(シンダイ)台なくまし
さもたゝ見まいりて心したまふ人々とも世をそむきたまひた
給やさまは大やまとおまくしにより入る紀中納言
中々ともむ是大臣の御心をめおかりおりへまいりて

八宮の北の方也又大臣をもなく成給ふと見えたり　北方の親也

おやたちの思しおきてたりしさまなと

思ひ出給ふにたとしへなき事多かれと　思出給ふは北方

の心也たとしへなきとは北の方のさいはひしさまの思ひさまよりも

なり

ふかき御契の二つなきはかりをうき世のなくさめにて又なく

のみたのみかはし給へり　此御中にはふかき契有て心もとなかり

ける事はさうさうしくつれつれなるなくさめにいかてをかし

からんちこもかなと宮そ時々おほしのたまひけるにめつ

らしく女君のいとうつくしけなる生れ給へりこれをかき

りのあはれなる物に思ひかしつき給ふに

大君也　八宮と北方との間の事也

又さしつゝきけしきはみ給て此たひはおとこにてもとお

ほしたるに　おなしさまに北の大君と同し女也と又云

しさまにて給ふ　中君(十三)とは也

たひらかにはし給ひなからいといたくわつらひ給ひ　此宮を

姫君をうみ給ひし時北方のうせ給ふ事もありつる

男子をと思しけれとも女子なるをくやしかりけれと也　此姫君

を後に今女子ありし也此宮々の母北方とある

常給也

いといたくわつらひてうせ給ひぬ宮あさましくおほしまとふ

北の方は中君の時産後を煩らひてうせ給也

ありふるにつけてもいとはしたなくたへかたき事おほかる

世なれと　八宮の連々(レンレン)の御心をいへり

見すてかたくあはれなる人の御ありさま心さまにかけとめら

るゝほたしはかりにおもひねんしつゝすくしひとりとまりていとゝき

さましきをも有へからす御いりをもうけ人くさをもはらみさせて
こそ見てんけれとも　又宮をも出て遁世(トンセイ)の事ハおもひしられ
ともかくもわれ心のまゝにけふも又しき所へ行て出家の身をもなく
しるへき事也
ほりの何事かよくいとおもふこゝろよりいてたるへき人きこえておほし
召れて　上臈(ラウ)のみちをよろつ侍れと云をも同し心也お
さるへき人ゝちを独(ヒトリ)してハいそくてこそたて侍らんするにおもひ
ほかなき事也
ほとゝきすもおもしろし侍れと思ひつゝ人なくてのこし
ためんとおもしく御情たゆくおもひてよし侍をも返事も
遁世をとゝまるやのはん也
そのくわしき事をまさに給はりていちれぬにくしく行にま
ほしき状の給くれ乃心あさくさめみくをのつしそまさし給ふ

姫君たちれうまき也
故下むまれ侍し君をたてゝ女人くをも　中君乃事
あるへし
いよゝや御心しく心かくあるうちはふやさてそ仏まつりてをあそ
くひのすし候つされとも　此中君ゆへみてそみえしもあくなり
侍るれと此姫君を見人てをも仏まつれをつゝやくとも
いそ(むね)やと云詞　古ハいて我を人あとさめ我大舟乃中されたる
と人物を召ころそ　同いて人ハとのとそゝ紀月菊始
はしめをそてきみて我をあつりいてハ宿くとやさしとふ
やさしき詞也とくとも
うるはしの心まかせく行事をも思ほしわかれしほとあつらひこれ
をいとむつかしき事をたくこの君紙によくおほし見侍つく行され
とおほせとも心をまかせ一ことあんしあるりのしやまなる給ふされ

此方今はなき人をなくし中君の御けはひ又なり君を慰
兄もたらはへとの給ひ出し也
さるは九世の契をはしき杉かくなれと　　打返しこそあま
此中君生れ給ふ時母のなくなり給ふをもとの宮はらぬ也
さるへきにこそハありけめと今はとみてしまていと哀と思ひ
て　よしく光をも先世のちぎりこそありけめと思ふ也
うしろめたき人の給ひしとおほしいでゝこの君をかへ
りみるしなり給ふらちあんまりとにいとかなしう
母の亡はての時をも中君のあるを心苦とおほしの給ひ
とおほしとも
ゆくしたまて掲し給ふる　　奇特なるきとや云也
姫君をんなをまつくにもしわつかくにくみるありてなしと
きくうくんなく亡き付てかたし給ふる　　光ハ大君のこと也

此物語ハあまた所に婦子君と姫君とかりつかくかく
と婦なるへし
つるうしくやんとちか紀すちにまさりてつかきとも付させ
さまに思ひうし法の宗も給へと　　光ハ中君の事也父宮
のつるうしき心ひ給ふへし又大君の事にも
それとぬるのおほく年月まさへ宮北うち抱きひしくのと
ありましき給ふへくもそうつかうぬれしちするに
毎事に不便の儀也　　堪忍せぬ也
ゑ思ひ給つるを
隙なくに思ひつるひくまいてちかつ
わつきくれ給めのとも　　河　　女子なとも若君と云年わか紀
ころや
されハそなにをかくしきへもしとみりへ給ふはかりなれ

も
出家りを結ても縁つなり給ふ其の乱にて縁めのと
ともえ求行かてある縁よ化ても人行へハそまさん給
子をすてゝ出しとや
はとにつきたるん何さくふくれさる化命もと見えまて我り
まくれん　下﨟の兄乃となま六て此のまむしをかまを
見ゝく女子を捨てつかしとやそれとんわさ化とおるるも
年ゝく宮仕へさくるゝ給　河　誉角　日首
さんかふ新ろく我はしろかゝ京の池山家と化まし　きまる見
むりしにろりてりともゝうわまほまうる縁清まくとなりめ
給ふ　京乃家のるまや
まつし家ともせはくしきんも家りあまほとりはくろ　天家と
ぬ人ともろ化まんにくさ行もやかたまけを
清りさと給をろくしきんもなれるまや

新の思ふそ雨えりおたまもやつまと落むりくよつきをあう
花ぬ家乃こゝともまなとも　掃地(サウヂ)ぬとのうれさ梅や
れおし私よ見んをやし給ひしはし我しまりくさむるまともおりう
えれいとくしをさひしをまるをはんるなかをまんに
れおしんり　ふまそろつまにとの縁や
ちよ川乃清りきつとまろりをわさとせさきを行てあきくれ我と
なひ給ふり我はしとものうく清し梅くたえひのちりんくち
れしう家んおりくもくれたはりあり契りやおほゆる縁まへ
てあふてゝの　河　持佛(ヂブツ)荘厳(シヤウゴン)や
世乃人あいて　八文とさゝにかまあともろ人しとや
い梅清くにとのを年月まそ人も世中とおほしきあちくんを
ろさハ私しつとに服まて行てこ見乃うを給すしこみするを
莬もも同私や池人すんまかうさしまや

まことの人のさ様なる心も人なとゝかゝれすてもおなし此語ハむかり
あつさ　此男女の色ある事をいへり一向好色の心をな
さる也故宮とハ心をかれたる也
なとうさしもわらへ侍とれかめしひき　是ハ絵しつゝ
人なとの宮とすゝむなまりてかやかなしわかるまゝにて
ひとつまもなえし語の女ねとゝの縁や
た
又世ふきくひかれやうにのこる我ハ物思ゆへなあれと何かあれ
心まなとにとまゝ行のなしさハたくひかれやうなれ
やそもまこもわらふけれハさやうなるもあれとの縁やそれと
さのこやえやこり
行ずひとにあはれなる梅はんはくひとし語らひとうく見へるまし
なきつさなれ文のうちも　是も世上れへ乃んつかひ
のやうなく心あまともく語るとの縁や

とのつらきて女さすくわさまやとへるまもなき心あそてな
まくれとはかなくしてもゆたにとも名なく又あまそて都の
まとゝさらしめしつるま往りゆく念もものひかりくめハ心見えた
ちんとまて何そのひやかくをさ候も行人ハ　心まもちなとむら
あ語りてもし又文の意趣なとゝとも見なりをはりとの語
らんとくやまのしめしつる事とともまとなまなりて名つく
あまそて心縁のなりとやまかるやや
らとなかりしあうち乃んはかなきなとそられさは何そひとさた
つきてもんさへとも紙見あまり語よ姫君ハ爺かくしもきう
くれまゝさうに見えも語の君ハ都のことにらうなるきなる後
してをのはかなしたるあさひかりつとうかくしゝ極てみおえ
もと　碁打　篇突也乃んつきとハ古集の文字を乃ん
とかくして其語乃文字ハ何と云字そや　問よ才学強よ

蒼きあをき色とよめんはさぞと云り

春のうらゝかなる日のまた池の水なるをもみなうちあり

つとめのまてさへはなしさへなつてもなきゝれさらに見給

ひしくさもはなひらきれまぬをとらやましくなりめ給て見

たちたれとも色をもしへ中のく給なりけりとわりしきにちいさ花の

ほとんとむかしさかりにしてまめのねとも衰りわりく

少女のまし八海をうけ給て

花　名高きも皆したがふはな春の心

ほるや鶯巻(ヲシ)ハ雌(シ)雄(ユウ)離(ハナレ)ぬるも一川が花のまにて今一川を

庭うてきぬるをいへり杜(ト)子(シ)美(ミ)が詩(シ)にも鶯(エン)巻(ワウ)不独宿(スヒトリシユクセ)ニと

悠まりうそうれ文水のゆはなれまで給て名高れうひ

そなまぬとうらやましく見ん給やと

うち住くはりひりうり名高れうろとの比世りたちとくれぬん

八宮それはなひさきかしやい水のまとくま給りと給ふ也

るゝのことハ鴨(ワウ)乃子(ゴ)をひろり又うる孔子ともひうきぞれとの

まそめ花世り花奴給や水のはくる奴給り何とて我る

をくまてあならそと云心也立なくまゐんと云ものは何と

てとつふみともる世ニあやつり比まろひ身の身も知ほし

古

久かたのむかしのとけきまま云れ日に志川ゐるく花のちりらん

月

時る秋とハあらしに存花のうれ世中になるにてゝくらくん

比あそとまもにゆとてむかのちるらん何とて所海すんと也

花

比うちハ姫宮東の所ぐすと読給へり楓りのこれ世とふつ

を侍りとのこハうきの子やうかれ物語卯二さいしやう

めつしをいてきたうるとのごたうありくうひのうちに

今こめ侍る花そハ天の宮かるゝ人さたらんあん古葉(ククリ)給

て何て宮りもまつとにあかりそしむるうれて御絶せよ

とてあまれを何てあくらしきあるれとの給ひの所と

の縁とありけり
心はくしありやとめをしのこひ給ふらんとさまかきたまへり
まことに宮ありとし法乃ちからあるひは庭を清そふと給ふなれ
ど、さえあもありてはあさきめされて天満をとうしつれ文縁法なんかへひ
菅子地の詞也
あるとし此言人をあ縁くさと縁く志をけるに法を後にとたまふ
しるあり　又宮ハ姫君をとうしつれ文縁とて我八りんにも道
ここあ紙し此あへてると三と縁くとまちつしもあつめの
菅子乃地也
姫君ん八法りもつるとやとしもおかまおきてふあるしひろやうにあ
こさまをを縁そをこまたうき縁く
又ある縁へてと八文字の詞也　　大君のことを紙なりき
もくるとよはかきつまさあり中てうきなりぬ縁人を

硯(スヾリ)八文殊(モンジユ)の法眼(ホフゲン)也此ゆへに眼石(ガンセキ)と云此教をと仮(カリ)く硯石(セキ)とは
出也とて仍(ヨツテ)此家(オキテ)に掲をとりくさるも菅家(カンケ)乃法自記(ニツキ)にも硯り
掲不(ズ)書(カヽ)とおぼえて　菅家是まてにも抄出(ヌキイダ)してに掲八てきり
きあしのやうし八はりへ法しあや　私　松蘿利とものり
弄 又打節(フシ)乃つきめるやとて
もちろひくうき縁ふ　大君の法なりや
いそりくもそくちあるまとさ子あまもうれしるれ契をそとしほ
大君あり　母のなく姫縁く八何とかして見渡とよも我
あそそちあめる我心打まよりもうちあすもまやとやそまでとう
きゝあるれとうけてゆへりき此あるるの上よりくわる契りのち
と紙ありきたるとのんあるへし
よろしねとその打つをハいとゆきありあるまてもさ打ひさききえん
ゑてましまうもつるを縁るなり恨とあり　文字のんも

わか君をもうけ給へとあれは　是ハ中宮の事也
今まうしわたさるゝをにくしとまうさせ給へり　おさなき心
人のけさうしけるやう也
あらくともよろしくちかきはとしごろハ我そ皇子にならんとおもひけるに
中宮　又宮のあらくなりとこそすゝやうにおもひて給
なれハ一品の宮たる給ひもおはしけるやうに宮へさし
ととやらくやゝこそ給はよかりせて是給ふことも有けむ也
河　大和物語
故中務宮北のかたうせ給て後ちひさき君たちを引具
して三条右大臣殿にすみ給ひけりいみじうかなしうして経ふ
ほどもいたうしくれ侍りけれ彼北の方のおとうと九の君を
やかてえ給はんとなんおもひけるをなにかはさもとおやも
ゆるしたまひたりけるにいかゝありけん　師輔大臣
御めにはあはせ奉り給ひけるにその時にかきて奉りける

むかし給へる心くるしさやかなしうなんまとの
宮なりけんかりしそ侍るに向て思ひ給ふなと
云人の色をつかねしに為とおもひくに給へるかとおもひつる
文の詞　うちとけて（？）思ひとりし心の中も給はりと
拾遺　君か子ハまことに思ひける人かくなりけるのみもてなすのも有
御ことも申す人をそへてかへりまいらすもなにかはとおもひ
色はをしくあはれさ給ふくらうたきなと御ことゝ思ひ
ましく所くらしうめて給ひさせ給ひし給ふをみそてまゐらせ給ふなん
ありて　文宮の事也
たゝくもし給ひ姫君の御心そなりてわか君ありさまに此御とをと思はれ
さまけしきをほのくみにそなへてあはれ給ひても宮めくにもあ
らそいと打しく事也　文宮の郢曲
文字の郢曲なとも給也
ちゝみことの母女御の色をそへてなんうち給てもろくしきれ

うしろのかたにて母のおはせぬなれはさしあたりてなく
もえうつくしひ給へれ　　八宮ハ文相襲にて母女御なとも
やうやうかくれ給へるや母ハ大臣のむすめ也大臣ハうけ給はるを
なし
まして世中にとこほくたのみをとさてうしろみなとも給へん
そこはかとなく宮ゆる中にもあさましうあてにおほとかなる
女のやうにおほとかにて古よの御かたちの
八宮ハ世継にて一向ひとかたならぬよるへなくやうなる御心のうち
おほちおとゝの御そうふ女御やうの后をつきをもとめ給へれ
と行末もなくなりぬへうせさせて御つかさもなくてなん
さとうちとけて世はりなかなかさまさきにひとつに心ほそ
なる人もなくさはなしくなる事のみに　　母女御の父大臣
ますますゆつり給ふをのみを也

よし立給て冷泉院とハ申しをき給ふんやの御事也されバ
源氏を冷泉院と見奉り給へとそのよさまつるを給
たんの大后の御たくみ也
我御時にてかくしつるなまう給ふさまをたすけ給へなく
かの后の御世の御時も宮をとらてうしはらんと也
かなさこれ御子なりしひとつ御ハしますかとはそれを
冷泉院源氏なとの御まへてまつるも八宮をおしこめ給
なるへし
いまくこの御法ほなくにあまりそそのる世みなくこゆましくひ給
まはた　源氏冷泉院とはさくに御子孫(コシソン)の代(ヨ)御おこなひ(オコナフ)せられ
大八宮をこえましくひ給ぬとも
又は山寺御ひしたまにあまりそそのさんとさりせよ御所
をおはしもてたるも　さやうなるにつきそてまうらひ

つなるよし也
又源氏となるとこ給ふ宮やをたけりといとくしき宮の御ま
しをおんなかくこりはちひとこ給へ冬の御すへしこそ也
なりなれ八宮治とのみやすふ山里に給へる事なるに
まるきま給ふひもそて給へる世なすれともとてことにそれま
なんと去りおはさる　八宮の京の家炎上(エンシヤウ)也弟(ヲトヽ)事
極(キハメ)なる所さをとみけりま　古 元河内拾遺 家とのこはれに
あるを所しくはん此説也
かしこの事をひなとちらく見てうしかまつしなる川のむかひに
てこそかなることなにれをぬくるも所まとみてたせん
宇治を思ひやるへし
花の名残たえなれぬ也　宇治の面白き所なるを
ひとやかたらにすかていとしくもなくおほしうほらかるす

あり　たつみしるすとあり　八宮宇治の山庄の
かくれ家にすみぬる世を山のすみかとも
ことはめはいへり
むかし人とのしめつましくやといひこきくたりぬれはなにあらさを
里　小野のことゝもの詠てり
おらしくても宿も煙よ聞ゆしと行とてつかさきしのこゝのちも常世
八宮辞　何ふおもるもて何のはまうに瀆路不哀流にに
いさとかわひそも大すれやうすれと歌の行まりにうらま
たのそてりつるむさとも有ぬへし
いあるくひかくそ行けしくれくや　此　名のりせいつる縁
のことだや
いとくやうきあまる涛をもんかにたち見まる人なしらやしれ
トをあそとる中ひさる山の門ともこのにあすりこはれまりつゝう

まつる
花　月まゝはさるくにとまは晃非ゝの山のきあるて光りしるすく
善の都声ちるなくなりなくて何かしるこしゝ路よ　無別
宇治ハ憂きとかれ不とつてうことにつる覚る思ひのちるすくなつん
とその詞と枕よさとあるを
河古　居のくれ善れれ声をまたいのこ思ははるまぬ世中のうさ
はうち山り釣りつゝもたちあるあさうきとこけるもたうしいとうく
こゝて世の思ほしともうるらねと行さく思ほやをそことにとそて
はうつをこゝありまねるゝにはゑれくちゐれ所とにするにすさ
ひしな浅き生たくうてゝゆわさとせさを路のくほりめんとよ
こあくひ行へえたりとくり雲のとてはるりまつる
喜ハ喜撰あとの統例よるいくくけるすや阿闍梨とも窟
位のくをしぬとも紀文のつうたるをもいや官位なともと

哥 浅きりや
古今集喜撰法師哥
我庵ハ都のたつミしかぞすむ世をうぢ山と人ハいふなり
或書云喜撰隠居宇治山持密咒食松葉得仙道云々
後冷泉院御宇永承七年に頼通公宇治の別業をとて
寺となして平等院と名付く後々わきゑも四口とり
よせて慈覚智證の両流を補せしめ給ふ四口四人
ある也
平等院の鐘のひゞきるゝとのかねくときこえきりをまき
まいつよくこのよれのそめみおちもなりたしとやきこえ法
光ハ阿弥陀の教で学文するてしも経を八宮の
説きうをなすら也　年　八宗をひとつにすかる学者法文の
理をとく也とそ

むかしよりつちをれる人はおもひのかなしかなる池のきも
とめ人をおもひのとわさら見てくをみえをてんうしろめたさも
うちにあんこゝろをさるるみちにかゝりゑもとくぬなると
河　阿弥陀経　極楽國土有七寶池八功徳水充満其中池底純以
金沙布地乃至池中蓮花大如車輪云々
花実方
名ふかるとハ蓮の葉もなりけるは蓮の上の玉をちらさ給へと
寂蓮上人
一たひもあるものはこれとぞいふ人の蓮のうへのかきをぬかす
花そてなく物ゑるらし哥　わきてこころに辞して隠心なく
宮のくらり哥也人もかけたりもすまてハ宗の法祠也
いけるとハ冷泉院をとぢてしかるをひとく法經あると
花咲ゆる人ありけるを　おれ祠ありやをまとふとも
はかなくとものたまふやうなれと冷泉院ハおりるの法
つなれ花と年経ある人とし

京より出家はいでに来りて　主ぼあるは冷泉院へ来るや
まへの法る人こ之あと法らんしてこゝを給るをも尊うて
そ　冷泉院云籍のことゝもとらせ給や
八宗のいとつして　色よりわさらを此詞也
あいまり此法さを法を是かく得し給ふるれ
河　内義(ナイギ)　内典(ナイデン)也とそ
さる人あぬにいてもまの道行へるにやまの給らんかくわすひ
ともまし行へるをとさてを此ひしりのあるをて仏あん見なく行そ
出家也　仏法の宿縁(シユクエン)なくやとも　在　物の斎(サイ)持なとも
いまくさうちかかへ給ふにや　冷泉院乃法詞也
そくなしつをせめこれわりあるへてはけたある義なる給ふとなる
つとあとの給ふたは　俗聖(ゾクヒジリ)やつさうあんあり也そまとそる
てまもへし　同(オナジ)法詞也　河　淨名居士云身在(ザイ)家(ケ)心出家三八

俗形(ゾクギヤウ)ふて戒行を持(タモ)ちける人や四アこの中に優婆塞(ウバソク)も
や唐土(モロコシ)にも龐居士(ハウコジ)などいひて多く此類(ルイ)あり凡そ亡号(ヒヤウモン)八字必(ス)
今出家十地以上菩薩八ても緑なれやとそ
先　東坡(トウバ)山谷(サンコク)なども　みなくして有髪(ウハツ)僧在家僧など待も従ひ
宰相中将もほまへ入なさけるひ給く　薫乃ことあり
白氏之夜にて宰相中将といひしかくみなくともあくいる
いそ法のことあやされど入くるて入也
弟　紅梅とて薫中納言也此先を八宮の事也とを
秋しき世中とていとまさまいそれるとひとありかわとある余
と入りあくてめしつ故さうるうとは法ともとくちわりけてもく
しられと入て　ほとかり　薫のんもとさ俺しく思
ひし給と八の宮柏木の子とそうるをなおく乃心もされを柏
木此跡をも同じ家の知めて出家此也

そのかみひとつに数ならぬのさまにてやうやうにとみにもえはゝかりく
宇治給ふ　八宮の御さまをあはれにおほしてたゝかひ給ふなりと
てなくとゞめ給ふとや
あけのんさしきまとふするも持し給へる経をよみきこえしに給ひ
となりけり　あけ　出家也八宮の御こゝろを給ひ法師乃
みつから也
いまはなりてかくてるし此女子ともれはうへとさこえん給ひ様
ぬとなん　さしめくみすなに出家えし給ひけるとかやん
あこゆへ子との縁也
あけくれ給りあそとそうもとさは事のねのめつるはちきこそよく
給ひそうもとや或(アルホン)本にたまふとこえるもあり
まにまこの姫君たちれにと思ひあそきてはそひ給へる
川なきにさかひく宇治給ふは　さるかてくにかも将(ハヽ)也

いとおほしめしくらさくにちく給ひとひやうきまつるやとて
たゞはめつきは　歌(カ)舞(ブ)乃菩薩(ホサツ)れるとつるやうさくもを
還(カウ)迎(サウ)也こゝみはもとづ迎たるなりけるかは古代(コタイ)也常
めしき山也極楽(ゴクラク)歌(カ)舞(ブ)菩薩とぞ云り
院の御くさき給て　冷泉院の御様也
さぶらひしつとのおさうに給ひ出てさよのかきはしりて宇治とくし
くんとそしきうゝ国くをおもしのことやうしろめたくとひすて
くくもてまつりひ給ふらんと
院の御祈也給ひ以てしやの姫君達乃ことをの給へり
まし給ひもとくきせん阿闍梨とん　八宮の御たよりおもほされ
だうくの給ふ也
ゆつりやさしき給ひぬ事をまきの給へる　姫君と冷泉院
へ給ふりけへうしやとの御くん也

此院のみこと云ハ十此かたに移りおはしまし御弟朱雀院乃御
六条院よりわかきを定めし給し　是ハ冷泉院の御事也
桐壺院の十番め此御子と云儀なるへし
八乃宮此御子ともしをおほしいでて御　女三宮を源氏ニ
あつけ申されしことを院の思ひより給也
その君達をもはなちて此ゆかりのひとつふたつ此よをうちわたれ
御世話也　八宮乃姫君たちをおほしくおほし給也
中将の君にあつくかへ御らんこの思ひをもし給へて御心まへ給へとた
いのして見まほしきやと云所にて前なりぬる
中将乃君　薫のことも八宮を見まほしきや此所也
冷泉院のとこそ八宮のかくときこしめせおほさん薫の
わらさ心はかくおはせてゆくと云り
かくいふさるも此の御ため人なとりなりて此なるらしひ給也

ゐく　薫のおまへして八宮へ御文給也
まいらせてくはもの〳〵しきに給りて給へなとうらやみ給ふ
内〳〵八宮の御気色(キショク)をも見給へとおほせらるに薫の給也
御心ハ深くとはかくして哀なる御すまゐを　冷泉院
八阿闍梨か院を御前にて文かきて御使を給はせさる
をかんしたり
人のあはれはさりとをりしる給ふかく　わさと也けり
なま心をさしめしあらましと八宮へ御使まての給也
世といひて山里の御すまゐも八重立つ雲や霧こめたる
冷泉院御文　院も八宮とたのみし心ます御のかれた
くる御心めせとも八宮ゐ御雲のかくに八宮のかく
と隔行ありて思ひなからもなをさりとうちくち給ふ也
はさりこの御ゆかりかとされまうてくる此宮の事も姫君のめ

あつまきたれ此人々のつくりたまへる山かけまいりと
めつらしく思すらむよしひたふるにきこゆるはけきたるされ
なとして　大かたの使されたとゆかしく人跡(ジンセキ)絶なる心な
寄へし　　　真(ナホ)なるやうれ此
さしかくしたまてきこやしかし侍る御返
そてきやしや
跡たえて心すむとはなけれとも世をうち山にやとをこそかれ
八宮御返　　世中に跡たえてもしんのをしぬやうよの
侍人出家し侍上手なく乃卑(ヒ)下(ケ)此んや世のかなれり
まへてそのつくりにもとも侍とやそきとうちら山
とゆうるや落(ラク)着(ヂヤク)八石ん乃うるにちの侍なさて世上此級(タヨリ)
なれよりてとくに得侍やうよの侍なしかるは志(シン)気(ゴツ)
乃義なるや　定家(テイカ)　跡絶くんもむとはなけれとも

世をうち山にやとをこそかれ
聖のとれおこなひをもしらぬ心のことにすい侍つまた侍よりうる
このうち事をもとてひとかしく治侍をも　冷泉院の人也
此御返事を御覧して侍世よ侍のとれとも出侍しての
御批判也　　天暦此御時御将(カンミン)光横(ヨカハ)川より侍事あり
御心よりとはうらも也
大将殿也又和古
都うりもうへとうみ奥山の横川の事を侍ようのきしや
ここ光少将事
九らる此うちのを常に悲しらそて出此人を大川山を侍らし
(ヒジリ)
非(ヒジリ)引(ワ)事(ダ)此返事のあるともや八宮此返事氏ん相(ナヒ)にかうるや
弁
世よ遠(シユツ)懐(クハイ)あるやうに冷泉院へ少石事ある也　八文卑下乃
御返なるれ侍侍也少将と光横川少らく天暦の御時侍人
さうして御返し此人也　大和物語に　文和古
住さる中ねての居心事なとにとのし侍事とかくうわりし

て習文字のうへにはしかくなんとけなかくしてへ
ひとりもつくえひなくにはつらふおりつるとそれは
やすきからくしにけり庭なくけるとくし　翁の評さ
つまにうちつれしと紙文八文はうるをやさしさや
わさとこころもあまりとふあるかひとしお月ゆくそるくしうも
おしぬ男かしも学中などそむかぶるかたあんともなくうる合
りけいねとなどのつくつくもうち石あとまかへつらくてあん
もくしくる紙　翁のてと庭あり紀あらすて習(ナラヒ)読(ヨミ)あると
学(カク)文(モン)料(ハカリ)はゆきとつきんと紙して学ぶものかへおかへ
あれからはそつつしねともおもかきれ来(キ)ふかとの縁や
いと有りくるをおほ月さまに紙のけ好のにはへしまとうくむ
はつきてあんたのとせすしさけるあとく好んくろはやかし
あとかへり世のゆ　八文字のはくるすや翁の学ぶ庭なまくの

こころといはさらかくるとやまるやや
宮仕中などろとそめ紙として　ひとりのとりしまんの請さ
そむろことも秋萬けりら秋へあり時あすへとあれ学ともしめ
しとこひし庭えし世に行かとてあんたんと行くろかさるる
めの紙　八宮の出羽やあふとつ子梅ともへあら学中
の悲(カナシヘ)けるに打くれ物そとや
奈やくく学中とかはつるすひ　翁の庭四をさとく
あらやの好や
けるもとあるぬことは行しことお月ゆる首のかとに
元　あるぬことは行しくみの萬そに不知(シラヌ)あなる事あらく
たくひ庭のんや
さそくて後学ととへ今とくるとし世好くんかあくろくさ
さやくに後の学をやさてる八卦(ケチユウ)字将(ハタ)や

あてみはさくらにやたてひそれまゐらせとかくれにけり
とおもひめ給ひしを聞しめしてやう御宿さ後よりさとのつゝこ
そこにつれなうひかれたまひける
こゝふとき八宮の御事は
こきでんの御かたりさんつまひともしへしぜんやの富縁とは
かさねてくやうやにくとの御かたくおほくなりて
人々ともゝめ給ひてやおはしめさるゝや給ひひて御
きとや
のこりもくるしき心らするにもかくしるとおもふてなき給ふ
ぬへきなる給
八宮はうちにいひてもおほそ給へるに給ふる
ひとをもぐしつゝて給ふ給へて中宮めとまかひ
給ふらんとの御心や
来しうさゆくをおもふにまことさる所なくひとれしめく
をお給ひをもとへしひさとゝして忘却し給ふとふ悠や

阿闍梨かたりきこえぬとや
おもひてきこしめしつゝせたまはれのおまへにて八郎給へれ
なとの給ひて
こし給へし八宮れうつしおはのあ心をかけ
かうしはへりそこつらひ
せうそこうふや
薫は聞このとものあつる心をかれ
うつくしともおしてはちの宮やの給や
八宮と薫とかたらひ給
こうしともまうして給ふ
薫宇治へかよひ給や
きかひてしる御とも夜ほどもなる給へりさ夜ふけまうしめて
いとうもかるくさめりかけとりそひあへりしことゝもそれなり
八宮の御前にて薫の君まうておはしけんや
ただし山里やうへとほりかけてみくんとまうさむともぬへくのこやうる
おもひあかしとて給ひしかきもとまうけれ給へり
あくるに心とらまかりて給ひて水波のあじかみえける

しきさま也 又 新(ナイ)なると 驚(オドロ)くる心もあるにとや
物思ふもとちりしく所なりと　物思ふれもとも中々見もとこ尺
名残なれともかくもいへるや
心ゆきて見まさんにみる人なけれとも すけなすく かなしうらう
ひとりやと
宇治川の波の枕に夜さめて 橋(キ)姫のや ねさめるらむ
奥入(オクニウ)云 此哥同時哥也 不可為證(ショウカ)哥云々
わりなきたちあるなみて思ふなり　八宮の中 まうける所々
みそなやうにさひしき所なとの中くらへ よからぬ
を物とも わりなきたちたる所とおもひしりたるにこひしの物
なり 薫思心也
うれしきこと我心にはあひぬれはりけりなれ　心ゆかぬ
もれけりなとて一切の心との事にくらんのとかくぬ

と云 捨(ステ)人の山といふ也
なんなそたらなにこもりしみると うらみんよの常也 女
しきたまひてあるか物はかひしやととしそうくる前めあり
さ後也　薫の心は姫君をまとひしものにはおもひはて給ぬ
給へり女くしいまたはかなるにしとをしそうやなきぬ
風流(フリウ)なるわかくしき也
後のほうにはなくしまる世をすてえおもはすよくなる　姫君の御わさ
しまは行末をと云り
ゆきはへの所　女君きこしめしるなも
もえんおかしき人なきおなえしもそて人は心ゆかなくへとも
思ひはうさんすくれはかくものゆかしともあるわすかなりけり
薫の心也我をこ見人(ミヌヒト)はまりけると思うて云るもされとちなと
八ゆきしもこそおほ下(ゲ)ぬ心ちる人へし

さまとかくいひてひとりひとりにやまひかくそへて
とゝのへ給ふ此ハなくさめかくしきことおほかりしことゝもにち
かく行されてまんとしたまひしひとゝやなとといふへしとて
宮の内府様のつとめさせたまふとかくれんこのよしみやすく行
ひさしく来る給ひけり　世中の好色ハなほ思ひ
されきんとてこゝへ来りてさやうに見さしむ所有て
八宮への出さるをきかせんとや
いひやうにそくあつしけれとまた宮のおもてさるへき法文
あとかさとかへきれたるさてあしくそ　葛の花されは我を
さりうらはやくあつかひハ俗形なりけれとあらはへとい
ひと優婆塞ハ梵語唐土にて龍しては近事男といふ俗な
うら弘の名を修行せしや弘乃四郎此弟子の影一也かく
義乃役公小角年廿三にしてかとえれまてゆかしの山
まへく前の陀羅尼を合として孔雀明王
の咒をよみて修行仙術をえて鬼神をもつかへ侍り
ちと役優婆塞と名付山伏の行ハもよほしける迄
つとめられしと　かの役の行者此人の氏すや小角
六
うるはしくかれをあまた山の椎の本にかくれそかし一座まはりけり
なとすくの給ふなり　八宮の葛城を行とや
されはまた門人とゝける法師あまたれはうれしとあまりも
こゝろし見ても話とりける　葛ハ三女の流義をさめて世
これへりねまひあつしにけるとや
ちうくれ優婆塞優婆夷のきさくいつはりなく　一寺の
僧持錫化身といふ人かなしとや　寄瀧や　非　さしそ天
台座主ゆかしくけさるとしいふとしいふやうなりとや
さもくふかくあつらつまとひあつくハさんとおもくし

くすしの語り　きこゆ　やむごとなき人にもえらびとゞまり
又その人ならぬ仏の御弟子なれ　僧なるをばいやしくて田舎(イナカ)
などのものゝしらぬやうなるそしりをまねぶ人などはあれど
ことやうなるもの也
いむこと絶ゆまじかりけるをあなたうとさはいはれねど　仏の御弟(デ)
子(シ)と云ふことありけて髪(カミ)などそるも又戒(カイ)をたもちなんと
も法は行ふまじとや
世をいとひやしくてはたゞそこちなげきをおしなれなるいと
惜しみそて　云便(ジヨウビン)なるとなまめいてやしなひかとやこ
ちなげきとはことよく我(ワレ)ら持ちたゆりしたる人とはいふ物
まくとは十分(ゴ)ならぬんなるべし　花ごちなきとは公骨(ブコツ)也
俗(ゾク)ならひやうなるにぞ我だになる類とみひなかりし
侍りとぞ

さるは行ひやすくてそれいとさなくなどしくて志めやすなりつゝ
ひじの道と常ちかりたる法にかなるとにめしいれなりしひ行ふも
いときはふかきのむすびしもなどあるを
ようう聖の行て我(ガ)の寝(シン)所(ゴヨ)なるとくへめしつれてうしひ語　薫乃出仕(シユツシ)
あるものやしまず便なるとはむつしやもやう語さればとるへ
あるべし
いとこの世にんくれしきさましての語つるとのへもわりなし
仏の道をとし人なるも見くくさまなきとひまじきまけ
さもまるも八宮はるゝと薫のゆうかん也　八宮をとさまれ
あられくぬゆ仏の道さとりてはありし語と
との道さとるもみくくはなけきとともや也
またんへる物のへをとき語くそのいとてもにどのし行ふれも
俗行る人る天然(テンネン)と柱(ハシラ)なとあるやうみて各(カク)別(ベツ)なれるなるも

河 天道無親唯与善人 仏教善性人悪性人あり又孟子に
も性善性悪と云りと云 弄 高貴の人のへんなるべし
過去の戒行によるべし　河海の君人不相叶こと
花鳥説同之　孫 君人にも智恵ありて物の位なやくさ
とるなるも河説語也
やうくなんなれば語なひとにてはまとる事ほ給ふ
ていと深きなかにてほとかなるまさる事つくおなん語
八宮と薫の君んなれるなるべし也
此君のおくそうとかりやすし給へ世にハ冷泉院よりもつまよ
ゆせうそこあとかりてこし給ふとにもわさしく宮ハ給ハ
もかくしてさひしきあかりしかもきうにやうらく人なんなる
さればおりわれさへにとかつひやさ給ふなるものめしう
薫の八宮をたうとびり給ふまうでて冷泉院よりもわ

宮は八宮へはとかよひ給ふとや
この君をもまけざるべきなどとに律師つゝしみをもやうくをも
まめやかなるをさとめくもんやまをはらはうぞうつり給ふこと
薫よりも八宮へ世務のことまでもわすれるにて
つかひ給ふとや
ことおほかるもになぬおきのをもはらこ　此頃より師に
説には此君ハ薫の十九歳より廿一歳と云るあるを
とかりその年を十九歳まで宰相中将に任したるこ
とかんとぞてさて八宮ありんぞすせ給ふといふをもあるとかきハ
廿一歳までのことあるを云説ことなりまや　弄 薫宰
相の三年をかるも宮治へ有候ありやとかむそのうち中
納言となりも又怙の雑乱別り註ありこ
四季ありおそらく行法念仏をこの川のつくハはしろのあたりをて

かくろへたるかたちのあはれにみえぬとてうれへ
さるはむかしのさまにはならひがたく七日九日とをく
なりゆきにけりと心ゆかしくはせまさりてなに
めぐるかのとぶらひのしるしにもと思ひてそこら
える事なりけり
　　　聖(ヒジリ)の念仏のかずに又なる世の事と
みちにて思ひやるも秋の末や
有明の月のまことにおもしろくゆかしきにたちそひてと思
ひくらせしにも人のおもふともなくなりし事かはりけりとも
　河
よりひとり暁この月を有明と云ふしぐれの後もすべて
残れる月をもさし秋の末冬のはじめ八九月下旬(ゲジュン)の比(コロ)
におなじき晩秋(バンシウ)の末は十六日より後の月を有明と云ふ
がのこよなくあはれに舟などもほのかにみゆるさまなりけ
りとみすてゆくまゝに雲のかかりてありとも見えぬ　宇治

みやは橋ある所なれど又舟あり。ちかくにまうで
きの物語と見えたり。舟橋のあともゆかぬ都のへだてや
　花
今は橋もなくわたるものにあるにやと
あけぼのゝ中をよく聴ていとあはれにおもしろき風のおとひゞき
ゆふぐれにたちかへるこれらの事のはてにやまさるとも
やうにんやりとつれなくやまぬ所ありぬべきなどゝきた
さとなきひとりたちこそかゝるらめ　　　　義之(ギシ)ノ古(コ)帖とすむ説
石見も　河　親行(チカユキ)説あるまじき帖とすむ人あるはやみの
まどひにまかせてたちみゆる事あるへの事とあるを
のぼりにあらぬは寂しき事ちかくにもいとゞくやしきや
んとは宇治の網代木(アジロギ)古事(コジ)にも見えたり継(ツギ)説(セツ)中とは秋中
やまきりの如何こそ
案ずるに世の中あまりにしげかりしにあはれなる事どもまた

由紀山などいふ事は何ほどと長木（ナガキ）と云詞いまだ見及
ばず野中には木陰（コカゲ）なる人さへはべらず野中の森（モリ）
野中は松桜などおほくよめど野中のさくらとたのみぬ
庵しはさけきこの了見（レウケン）桐壺は若菜の草むらの虫を撰（ヨ）
はらかに聞るも行きを今集の源也玉も用ゐてと
椎（シヒ）の葉は本より云くるけきき野ともと分の結へる色さしな
ともとひきりぬへしや治りも野は有へなまるは謎文
とかりをとむるに及ては
たはぶれなりもはやされば　　人分ぬ立ちれ
もしろき也
山たちてはへぬ森の花もあやなくもろき源の
薫奇　狂てとなる人しあやるくハあちさとき
末葉の花も色わり涸のまろき中也文　後如々　二寄

とゞまりてよみ給ふとあり非難（ヒナン）也
かくしは萩の露みちの里人さへもろく秋ゆく我涙かな
山川の辺を経くうさしとて老いしんのとゝとせさ給ふ
行かれ　里人あとの目をさまさんと思ふしとぞ
随身（ズイシン）あるゝとしたう給ふ人し
葉のちりなきとまげてここそうとうれしきのなられとも我
有ときてく西のかしをとゝ云ふしのひくとようへし給
つらなくれなるは分ひそ風ふきてさうとひく
秋はれ葉のうきはもとゆさ給也
ぬしなくぬうとおもろく移さめれ秋く有あちらく分わ
とんそのここをいさうりはあるもの山ねともいとをとあり
家もはちまかくわるむ行ときさくを清つさくたくれて
ぬしなくぬうと　　静也

古 しるしぬむかしそのかみ延喜の御門の第四の御子蘭丸と
申ことはきんの称の名たかふしとえうるさそう
八宮ハきんのよふうくましうせしを蝉丸ハつねに守路
きゝとや 琵 八宮をもとも蝉ハ志う行きぬ也
それわらもあらへしとこゝろつうきを行つてもむこの上もあのひぶ
なりけつも　　隣ぶきんをきうむとこらて入きてゆるされ
琵琶れひくさや
見うしぶてきに志くてゝよの情れかきに何きまをなれとも
ちうやアくたきなるうちしてうきうくつもとちものやとも物さ
よまきにねむしろしけうれともわうまにゐきあつう教へし
てさとしく守る志うしきう夜明しきに逢ひ行くて待を
まひきうくきゝつきて　　く行くるとハ一年引くさ又之く
をあり琵琶すハ秘曲ある也

師 此黄鐘調ハ笛の黄鐘調也 此巴の風香調也 此巴の黄
鐘調ハ笛の黄鐘調也 此巴ハ風香調 返風香調 秘曲あり
楊真操 流泉曲也 仍以此両調子為先 此巴ハ黄鐘調 八笛
の平調ハかはりたる也 掃部頭貞敏口調を定たり 風香
調 合笛ノ黄鐘調ニ 返風香 合笛ノ一越調ニ 双調 黄鐘調 合笛ノ平調
清調 合笛平調 盤渉調是也 今世ハ此外に 返黄鐘調
笛ノ太食調 双調 笛一越調 平調 笛盤渉調等あり 是不及記之
その外へかくれのことなきうくなしさなしきそへきたり
八宮とのゐへ人あらへし 術也
志うくあんこもりもあつれは しせうそこをとゝそ　　八ふあさ
彼寺に籠りし 為其人か蝉丸か也
守しさせめと[illegible]もと　　蝉の法此代[illegible]人へちなとや
あふうしうかゝうもわう法わくたゞひの[illegible]まさしう守

ゑさきんはあのしうくねまく来りてゆるつらしにくらん
それへと姫君のほうらに帰りて何われとの詞ともそえなん
なくさむ人なとの詞へえ見なくさゝれ
何の志るゝ也薫の詞也宮へ申すを無用と也 隔(カクス)わりの詞也
なすひとハ一七日の会紀の儀也
まち忍ひて申させ給へんとてきこつを とのゝ人の様也
姫君まての御われとの詞たをとらん薫の詞をとよしろふか
あり申させ給へんといふ姫君へ薫の申さる也行と申さん
とや
志りしやとあしくまもて 薫の詞也
年比人にくよのこゝ中すてゆかしきも上侍しとのよりなとも也
しなおりつの那志りしもこしたちくまてさく更紀との
かく御わりやはさまなく 姫君の御琴(コト)やと宇治詞也

の詞也
さしとたくまりけもん程と 琴引給ふ人と風(カセ)
来給くは何をひとをやら行ちん八つきなる人をとも也
みなことや御給くハつてゆへあるらんとの詞也
琴と申とうの物くるにや
御留ろひくもちの 薫のこと給わりの
ゆりなとくしさ心ちなとといとめてたくうしけるく
御ほゆ恵は との井人の下(ゲ)衆(ス)よ紀の中をといふ詞也
人さめさくるに雨かくらかん行我をとせと
このわん人の詞也
志もと人みくを御れかくよりと来りたちまし 給人給と
きりとりとをせさと給まんは 下をあくとあさ給
よりきの時ハ琴をやめ給とくるとや

しらくし女二宮もちかくしまゐらするとはかくさ給ひ
ちかくれ人ありしをきこしと聞けしの給ひけるなりと
よせて　八宮うくし給ふとや
うちまうしひとく何ちなるなれにとのうくしありしう
しのむ御行なき所　薫の様也
これ人ありしたに世れ法まあしにさくいはれへかなる後との給ひ
てたれたるへせよ　雅君とはめての給へりしも八
宇治のあたりしひよつるや　同　薫のあはさるゝや
我事まなくしきんなるとたれへきりくてわりしまゐらう
世法有様の　薫の怪しれたるまれよしの給や
あやしきを常ふるへきに思ひ行きぬなりとこまやかに
の給へる　薫の心はあやしきまて驚案たくたる
ありらんはましぬとや

何なうしこんなるよやうに様の字しや侍らんとて
とのかれ人の詞やいやくたなるれるや様字しありて
ハ迷惑たまとは阿法へく冰清し給ふとのんや
何まさの事まの人を行のもとへふ志てありて　行れとは垣也
み所なくてたとあなる所　一所と垣まて簡まりやや
きしうをたまわり御ざまの人をあしぬらうまよりひとくへく
このこれある人おりしらぬ何まさにかまうへかあ給をいふのこ
はなし　あきて見給へとも月おりしここやとにきりある
まるをたなりめて　薫いともんうへのもと人をしよを
うるやとのある人れ所行不可迎るなや雅君たまれあら
まひの音惑をへまえ給ふことを不忠也
もるれとももとくしみしうくまれあけて　少ましたるや
さるくまてしはなくらいたる所まよいろり　同　藤壺

くまなくおりてとふに見ゆるをいつれにハあはひかゝるを
人ゝかたるをものこゝにてとさしむきに友はかくなへなかり
まことひとりをわすれ侍さふる所とれと心さるを
女房まさりわくハ子となるへし
うちなれ人ひとりをハなかしにをとしなくれて此色を
まつなとをそてうちをもまさくるにしてわするにや
くまてうりいはら月乃鐵りいとなくはしいかそなまけは
うちなれ人　姉見のかたや
おふきなあくてうれしても月をまちのなはへりかなりとて
てはしのそむとろくはいそしきをさき子きに白ひやう
あるへし　月隠重山の兄人あまねくちくをあれなん不
及祥也　河月隠重山兮擎扇喩之　止観
拾　おふてははやきされ月のやうくれはかりやきうやハ人のむさき

同　秋乃秋は月ことも君をきかくれなきかけもみてはいくらあましら
松尾とよ羽を待るとみとも鴫まさりをへ白妙になをと撥と
ふ事をあまきえ月をまちのくになるんえるるへしとそ
釆　扇まなとて入あるとはまとはかくかけるき此物語乃さなき
あらうと
そひ事したる人をことのうへまかさしあまくくあをて　きれ
いまと見あるへし
史記云　いむ白をうちはうらうるとあ月なれ　妹見の羽也
魯陽公と云者洪まくまして要害をとまへなてとも
なまたむしかは城のうちにうくあ白院まふるぬあ
時の大将鐘とをおへくえまもとくま鐵刀内午錦
にあうぬまけ其鐵刀揮とくてるるなくをまを
あるを　河　還城楽陵王とわやぬめんとて白めくる

に撥して日代午にかへるといへり猶く後の男君の
弄 河海説也 所未詳 一説同意 問云河海に還城楽陵王と
あやかめんとて日のくるゝに撥して日代午にかへさん
まねくといへり何書の文字や一答 其書検てしも楽
の譜なとにのせたることなきにやとなるにや
ひさしくとは思ひよらすとてうちきゝてひさ
なる事なり　月は撥してまねく事はなきとの姉君の
詞也
今まてもかゝる事ともしりけりつきたり　是も中君詞なとなり
とすれともこれも月のかゝるつくり物なりとかのれることを
珍らしきとの語ぞかしなる事なるなり　大君の詞也琵琶
の隠月と云所に撥をわきまゐる物なれはかくいへり
花 琵琶の撥をかきまゐる穴をは隠月と云物なりけるの下也

ありそなかれなる月とかひきつゝ隠月のことを云ひし物
御かたみの詞なるくひとつゝ面白くかゝる御かたみのたまへる
ことにまてさまさしなれ共はさきてと是まはすへらはり
薫の心なりあて姫君たちのさま気しきを見るにもむかしとを
まうるにはちかひて一段と気得なる人々くそかしを
むかし物語なとにかきをはかれる女房なとのおかしきを
ことわりなるにもりやうなのことぬえひかる所しとかくゝりうん
とかく見えとてあなかしこ　弄 薫の心なるへしの物語
そかしもかく女のみひとりもありて琴ひきなとし給ふ
有人ありとかいてかういふく聞きて
あとありさゝ子ありと云事なりしことわりしことを
かれ女房なとのまゝしと薫のきこし時ちりし
なれくなれしかの今姫君ものつをとひて今世為

との仰也　件名物経は蝉丸の琴引給ひを中ねかくつきを給
ゐるよしにてたり又は津の守四月面白き夕暮ハ蝉丸の御作
琵琶法師あけて琴をも引けるをわかちひ給ふよしあり
昔に聞くれたる物のくさありぬ人なき世なりけむと思ふかく
ぬべし　秀竹乃きこえさやうに思ひへくともゆるさ　世中
ハ廣き物也かやうに面白き事も此物のくれなしとゆる覚乃

蓑虫のかんや

　　　蓑虫のかほに雪さかるを

又月さしいでてなんとおほせを徒り

　月の又さし出るハくもりし見尽せんのんや
　村雲此月乃月のかくし盛そしめふ所し出るなきあり
　又くもりて所ゝめかれしと見えとこゝ
わくれてより人おかしきをつきせぬる人やけうんをこれおろ
して
　蓑虫のひまなし給ふしと奥のかくるもつきたるなと

みぶつりぬ　人の覗ましとや申たるやへくこれへくるや
　つきせゆぬ人やわかうん此仰や
おとろかされけるにハけうちを分しやうにもすてなしてやとうく
止める昔をひとむきぬのをとともちほにつとなりのうくにんかるし
うそいましうあそでに
　こゝも蓑虫のころ給ひてんくおかしく思ふとや
　　　蝉丸出来のきん乃聲此弦操り
こやひの事給ひとたとも給やとかち立出く
そくり　　　風流乃指使

京より清車みそて来る人くへ人ハたてせり
　めみつへし其のあん内とんもし乙そおかけまいるみなくを
　とのもしのや　　　蓑虫のくへさわた
あらさゆる内つしひり　　茄のとれるの人のるや
おかしく来りつれとなかるうく袖し白きしてる月をとうしなく

葛の詞也文宮北は
さめてあんくさつる妹よしやのよよ
蜀(ルス)には糸路とことへり去なりし姫君乃琴なと申給
危ぶまれしさやうを姫君たちよ申さしますや
いふらぬまには西方かとも申しさせんかしとの給へるをふりて
皆々　くらいんをいつり
かく九重や誰なるんとは知ほしもようてうちとさをたてつる
ともに我をとやし琵琶つくんといふみしくらうしわやしもふ
何某風の姫つるとこひろきかなほとあれた折ところさ弟子
そとさふと心もさよひくらちありれはうちを
姫君ものん
あり葛氏の系図とまをていさ乃琵琶で琴をうちとと
て引弾と申給とそうさし路でそろりしさとや
清せう徒ことなとはうなれ人もいとうわくしなん人なゆうと
波宮(トノヰ)当人すや又そこなる女房なとすや

わかしにそよ終りのこととも申かけひくまくところさ妹まれ
主たまれハわかつることはなまつに　わかしにと給く
名やうのはいそうへてや云ん也　琵乃琵琶ハやそう
人もあらんと葛の人也
葛の清き也
はゆこそ宣はなる給
山さとむさ路かく人ともハはしつる君んとのそともお根こ家
清志とひさしいうるさ海も手さとくしあありこのふそ此まん
あはそく女あく作りけるを
葛の詞也
うちつきに流るるんそうさもみてそかくも手をつつ系ゆるまきしふ
山のりむちに宣路を高るをはるてとふくこそく寄あるなな
とうさひ夜ハさるさともはらんしきるらんとあん寄のより
う作りそひてまあやくにの給わりさんく此なそろうに皆申あん
きらも奇く　大かたのかさしみてくハ宣給えぬと也

ここくつりかへやうしとなるゝとくくとうらうけ道ミ女ちうれ
なをみつなと　きこえのかへりゝやうし第子院　一段
こうしくちふさ梅也
われくはるほと出てしとをみつそ　糸れ始すくいふ
とわうし南る也
わさとめいふ手閑をとうおもしうて　姫君の心也
なるる中とこひしくぬ有さ梅すてこうくわめとゆくいふ
ゆんさとてとくすしあり何てなるうこそしこのむもよへなうく床の
うたの緒　わか君の調也是ハ両ち女なもうたの緒なるうし
下れぬと芸乃色（ヘンタウ）答すやおかり露をぬきくるとさ
し調の来ぬうけてこうう床すとゆうくい身とふるうすや
かれこうなうくうなよとこうくとうか　なるとせのさうふをもや緒く
こる氏ひと流しとわするうさお明めりせ緒うんてそにわしる

迄なれ　芸の調やうさうすいまひともうと緒なうくこう
もうなうすゝ仕学の相ひなうしのそうしとさうしこうふゆをうり
さのひこあとこしくばうなはくいそて奴なのをと姫君一所で
うりこゝしもうほしつゆいうし打し　ふとも
有うてふうこうりとここともいしあるゝ法とさなる南とれ
八文字の調うすと芸氏の緒也
をとくひ律のしさをそ行れんうゝらふ香えれとしともとしくさ
そうし連と打れいふなかうくみ足のあすり待う　さやうし亡き物（キヤウ）
なりゝ文宮りそひ行おもこれ姫君の所んうゝうし亡よすゝう
こひとも由し浮（さ）しくふうとなし地のこのお八前へことと
とうしそうくなくやいし文の法心すゝなくひ緒りんとれ緒也
柱　さうなうやこおなのうし風いうそうさんうゝを氏を亡しうゝん柱
なうくさあさうれ明とこをうと行うんてそうひとつゆしめ

葵のうへこそ流浪の程をともおもひしらでなひハあり
ゆかれとや
よのはかなさをしらぬくらしさをもちかへす出しめしやまひのおく
やさしくれかうはかなきことをしてひとへに思ひとけしを[illegible]
らぬんはかなさにみえんとのつらさこそしめしあはれとおもふやうも
何りなん　葵の御かたあはれとれらのうへのめくハ
すへしさやうにつらくハおもはしくもれさしまじやそらへひさやう
のうへかたもくむかへあらざともなびくましかりけるかなはぬ
まさハのちくにかりしかしあはれさんとやとのつらしとも
連くはよ哥はつかまてれしや
はもしくかのにもくしゆるよの物つけりとやかなさを[illegible]
のこさくしさせ　葵のかたきとなくひとつとせはなれり
こさんうなくちむくらのことも[illegible]のすゑんとのおもしや下

紫の姫君の上ハ六条どのゝよのむかしや
いろくさ月れ月てくなるあさまを待みへなんとはむかしのあはれと
さしもおもひつきせぬかくのいのちのあはれと思ひわきまへさ
ままをかしんみとおもひのほかのかなしみにみをまかせて
八条のおほいどのにかくれたまひしあとをさりしおもひハ[illegible]
さたかならぬ程にてそのまゝ[illegible]のむかしなるとも
おもひ侍る
かくしはつかむ人のそきたるれそゆかり程よ
のみや葵への哥と余りゆかり待て姫君への程りあ[illegible]
[illegible]
[illegible]
もえて[illegible]て[illegible]のかるも
あはれしや
くさうしのうれわすし[illegible]をとおもはれ
柳[illegible]

宿木とや

みそのうちにてわかみや人々を　うらにて入まゐらせ

とれ翔をもちやてまいりたる人々にしたまはせし

まゐり様かしぬやうに給ひて所にさしきれのよ所れ

薫と称せられてありつるひやうとや

内大臣うちなとめでたしかくて見えさせらる御目をさ

紫式部かや弁也御あまたさはつかくらうまらしてくらへ子まう

あるさま御几帳のわたしくわかりひ給ふしや

いとよおやしき世中にもとさる御給

やはてまとのさまし色とをまゐる給ひしとかく　弁薫ましき給ふ

人の数ある御なかにわかりかさ給ひて　宮にはまゐりとや

内と右の人さへてかた見にとなりひかはまかしつきへひ御らんしてとみて

出すをかりまいりて給ふるにありつゝ御わたりなくさしれ給ひ

宮御をはしきたるに入り給ふとや

数あるを給ひし数給ふをも渡まししなまてたるたび人にもさせ給ると

是は弁の君の我給ふをも御つかはせと思ひなつかしや

わかさきの御ありつゝ給ひしたまひしてたりさせ給ひなくさ　薫の

まやうらんとゝのはしたなくまのまれあるをと

御さしい姫君たちの御許なる心や

あさやかに御勘にもなきひつきくへ御さまにてよしなきのまう

まれ　弁が心に入るもと薫の思ひや

いとさうくらうなしありて御心ならしけるに　薫の翔也たよ

つまなりけりしにとや

う動かし給ひ御かたにひまとてあまりさもけしきありしをあたる

さよのことに入れにつらまそてよるさに御かへくく給

弁に対(タイ)しての御翔や

本にはえらると見え侍らぬ世のくやしくおもひいでらるゝ
昔の御事ともかたりやみ給はず おぼつかなく思ひわたる心あり
なるかなと　弁が薫とのゝそれなりや
こなたは世にひかれてかくやとおもひたまへてはべりしに
年ごろこの程いへそこらしも見給ふ也　薫は大人子との自にかと
弁がいふよしやおぼえぬ御夢のやうなるに弁が語る也
はしるてる罷るやとえ行かへ思ひすまで
まかり若き柏木の事をのたまへんとのふんなる人へし　弁が詞也
哀なるむかし柏木ののこゝろのこしけんはやくそまかり出させ
え聞えさせでうしろめたう思ひ給へしをあやしう年ご
ろ頃へんとのつたへて御ともうちすれ思ひ給へかゝるをりも
薫は柏木の御子也しかと云也　此弁は柏木の
乳母女の子也　乳母子忠統ある人也

うしろめたう思ふ給ふる也　今まで洩りてゆくえなし也
まうでくる ありかたき御ためにもあはれにくれ心細くさせ
を給ふれとうちつけにおもひまぎらはしとて
あはれとおもふを　まぎらはしとてめり鬢はなれたるとも
思ひ給へたる人を深うなる物とおぼえてはべらいとう
うしろめたく　薫の心也
あやしうありけて　薫の心もそゞろにこのことおぼゆる
しとの給や
かくれなく思ふ事はひとつにありかなしくあはれなる語
なる人もなくて世のなかにこそおぼえ侍りしにやのこそかたち
涙をし給ひつゝ語るを　薫の詞也
こよひのことひそかにしとの給へと　薫の弁への給ふ
昔物語などのはしばしことどもの給へとおぼや

うか侍りてしと侍らんとし文侍るを　弁の君也是行

の侍りてしらあつまりしなとも文箱ともに秘めまとふて命下と也

秘されたりしを命おのむかへさるを侍るなと

河人命不停過於山水今日雖存明亦難保云何縦心令住悪法

泥洹経　雪山鳥唱云今日不知死明日不知死何故造巣栖安穏無常身

かくよろしきうちの世は侍らぬをとうもちゐてしめされ侍る

あん　此ハ若菜若柏木のこなた女三の宮の事

三条の宮に侍し小侍従それくかり侍りにあらぬとはの御文に

そのうちむかしのことつゝ侍へしれとも人まめくうを侍

まけ給世の事に　柏木と女三の宮とれ中の事をかしく人也弁

八柏木のめのとれむすめ小侍従と侍りしこや此弁の尼と

若柏木は宮侍の人さうらふ人也三条の宮と女三の宮なとり也

の御つかひ三条宮をとへ給ふへかりしを終にかく

くうちつるも也

まことなるかなそうはうとはさうりやうりてまてこゝろあらとせよそも

乃ゆとおもんこまたにかくれつゝひ侍りえさうらめさうらう

弁ハ更衣の女まなありて西国へくたりしか男まもなくさうらく

又のうちとも四五ヶ年宇治の宮まさうらふ也それを薫

ハさうらひ給ふと也

この仕後大納言とやうなる所にこれらの文まつ給ひてかく侍る

ひすゝ八柏の侍りてあとますや　是ハ紅梅大臣のうまる也

大臣の給ふをあやしみておもふるや紅梅のこれハ柏木の弟

あり紅梅ハ右大臣つ侍れさしつきの弟と也

かの御うへとてさそしめしつてかなしきを侍らん　薫ハ柏

木のうへをものはりてあとにさうらうしめまてうち弁か申也

もと経ていくちくを尽くさらぬ也ちれはし侍るを此わ乃う
あしさとまさ独のうつくわ侍しもそつ語つ多さを
柏木此没(ホツ)して後のことをつくるもお侍らぬとや
てとわてうき人侍まはかくおもしくあしく世語まゝ猶清
よそひ乃程をも夢のやうにちまん　薫も廿一ばかりのみや
姫君ちんとや夜の夢のやうに数年此侍りをもぬつと見るとや
彼故大納言乃君の後めれとに侍し八弁ゝ母すかん侍しあさ
夕ありはゝまつり侍しに人つもえみも侍らぬ身なれと
花　故大納言八新(スナハチ)柏木の事同人也二乃君八もと弁思ひ
人也
人ありこそせきともんよるもこく一何事もあるうとをわりつくち
うためのゆしをとてつきるとに姫君うし小母まひの末はうくに
後しようてゆきくの語ひさくるをおん侍しとをきうしめしを

尽きぬ御ちまん　めのとにも柏木此の語りぬるゆゑをも聞く
ハ弁まゝの語ををゝしとや
一二もも侍まてとゆそくるもゆゑしいそて侍るに　薫ハ柏木乃
後々子とみつるなりや
のこるとをと形見しめきて此人侍しハのまへにあんまこうしめし
もそて侍へきぬ　只今中坊をもとこうしめさんあらくえもふ
家り故ま中さんとや
わうさんくをつてゐるくちしを死たりせ侍まうしろひ
猶めるをもてとゆるもにおんとてさけくふうちみてもそうぬ
年ゝかそ二あつ女房あとのさまをとくうるもちてことゆるを
とハいつるや
わやしも夢くうかむ不すゞやうれものくとかはかるうもまう
やうにめつゝう人形見さるれは　薫の母也　ハ弁乃尼

薫ハ柏木のよそ子といふ事をこそしらさりけれとにこそありけれ
さあらぬやうにて神なとのつきて物つくもあるやう
なることの縁也　河　巫覡　文選　男カンナギ　女カンナキ　云々
行ひ連に行はかりそくおほしわたりあるはすらひと申たゝ中ま
てとかくゆかしかれと　薫のまかく申たく志給ふなる
きは物まゐれかくゆかしなとゝや
きたへめと志ましさしくまにある物さもにかく情くひて
よ於ひかしまそんを　さしくまに　うちつまに御とう
羽と同ん也此下の羽みる薫のまゝくおほしまんあるへし
河
さしよるとも也やうてとふみん也云々
こちくしうるへきれを　弁の尼よさしよるとにかゝめへ
あかく物くまるとあとし給へる薫の心ちまとよろめかく
人の見んとの氣色又とくしさやうに人の志らんとも也

そこえくれし志ひとくてとはなれぬ物くし　薫のこゝろ
志うともあかもゐる事ハあるましとや
つゆしへの志とも申侍るとも猶哀なりあんさしくいへりけれはいのちく
きうき給へ思ちられゆくはなし斗とあるゝ色ふ御つまを
薫の羽也ちしえ此物語のこゝろを〇て申給へんとや
おもちのく御念しそうめしく連ぬつぬさ海なる連月
薫のうやうに御つまたるにうよそく高の賭行（のり）あまも（と）
居（ゐ）給ひし絵りて姫君をくてとも行めてつれるにやうにお
ひしめさんとや文面月（メンボク）なれんや　抄　姫君たち御謗心
なとさんとのされしとや
ちよりうろの頃とするもハ口行しらあんとてたち給ふへ
まれなんとよはうちさきをあら紙姫君たちへ見おとし
給さんとも　弁　行のよするともやくう色ろや也　抄　わり陥（キャク）

心なれやうみはおほしめさじとや
うちおもひつまに寺の鐘の声かすかにきこえて夢いとふかく
きこゆるさまにも　又宮のこまりも山寺なる人ー
峯の八重雲をやおもひやりておほくあはれなるに
かの寺のかねのやうに峯の八重をのおとしておほく
やい八重なるや
花 さやおもふするをいさかひしとおもにおとろへてしも雲
同 白雲の八重にかさなるをみてもおもひやりの四方につる
猶これ姫君たちれはんのうちとをかくれし
弄 薫乃只今鐘の声をきかまほしくおほえましても姫君にいま
くたとも
行るさをおほしめしもしん　姫君の心は萬のあはれめ
てうなしからんと薫のをしかけまじくも

かくてやおくまでは山へわたりてそうしあとはほとけの
田舎びたるさまをことはりなや　猶かるる身にくははく
まして世おほしめすとはりとや
かかる宇治を見るに御心まかせかれた山さと寺こめてかく
薫哥　京への御使乃物思ふは宇治をまたはかなき
ひ宇治のきとさるまでのたに山とへ桂殿のこるや
河 桂尾山 宇治也、椎柴にまきされ山邊とあり
山城国
心はそくをもおもふかれとまたちかくるをもえしひかへつさ
薫のさ海や姫君のことば心まのけなるや
都れ人のめなかれ年まうたふ猶いとことにさひしきさる秋まへ
てふくをめつしうき見さるらん　薫のちかさを都みて
さ人一順と見るにましても宇治の人も猶をめつらしき
見えまなるや

浮なりし事も律人みてきこえひたまふは袖への事とつくほと
あはれそ　薫への返事を女房あまたおもひたるに心そ
御(ヅ)人みて見思ひなりけれと姉(アネ)君の御返しはしくも心あさ
の御事也
雲井の御事の袖の秋の比のいとと思ひ出なる事をも有
姉君返　薫への返事ゆかしくあそひたまへんとい
ふたまはせはとしころ又父の御かたしまもとおもひそめてたり
ゐさん人のまとおもはてとく秀れたちくにめあるとも一念ひ
やしきく心也又姫君達にあひく哀なる事也
弁
姫君囲(カコ)くの祈(テイモウ)むあられたる不思議也と
もくしうちあけむ又ゆかしへしてさうしも哀也
蘆(ヒニ)中のことをつくり
あふもくるしきをれしき事しみゆてぬあひたなきと

薫の心や宮のゆかしさとあり
きにしむも恋しなるおもひもはかなきゆゑゆかしさすすむ
弁
薫心もこまかに又この宮をとりもなほさす
なさおもてなき心ちして　物語(アタラ)にまかれてあまるとあり
たくくしきとの心也
けくなき頃とに　ゆかしきに宮よやもしらんとも
見くるしさんの心まや又おもぬ心すとそふ
とけ給ひつつうちとおもひ　薫の詞也下の心を
琴(キン)の事
のこるさいふもくしおもあれてしそ昔しを中の思ひさんまへ
めれ　連(レン)々見ゆかれてその心也
たるはかく世の人めのてもてなし給ひくはいるもをはり物
ありかつさつきありやうしうあんとて　姫君達

の薫とはかをるまれ人のやうにありかはしらず曲(キヨク)なれとや
はしたに好きものゝまてハなかなか物とさやうに心はかりはあら
人のやうにしおひくく心をしとも見えまし人行かぬハうら
めしきとや　弄　薫とたえての世れ人めきそてところを
き給ひとうしう給ふんやとて
との井人のえつかひありけしおもてよ知りしあなかしこめ給
宿直(トノヰ)人かねるやうれ雨や又来給ふるとのゝすすや
あしろ人さえうしきをありされとひともよくしぬすやあしらん
をさましあるかなしきなるまゝにゆきも見ん人くかくしまし
てりふあやしむなかをとまに葉かりつゝとのく何とすれ世
なりとなきたゝふゆかなかしきとものかゝれさきのゝへりけり
かひる　是ハ浮侍の人の見るさ母や人これさなけれ
ひとのよるにやと見るにそれ人のと然のさきまさ

中のしけどきれハ何くれとひとハうしろめたしとも
候　ときさまさしきたらん奥(ケウ)すれんや雨のさゝしとるや
花　内膳司式(ナイゼンノカミシキ)云　山城(ヤマシロ)近江国(アフミノクニ)氷魚(ヒヲ)網代(アジロ)各一処(ヲノヲノイツシヨ)其氷魚始(ヒヲハジメテ)
九月ニ至(ルマデ)十二月卅日ニ供(コウズ)之ヲ　今案(イマアンズルニ)あふくれ田上の網代(アジロ)ニ
まことまた氷魚も山城の宇治まてとなかりしこと
河　将貝之　宇治川のひとのよう移る音とそなく網代もるそのふしのつらさに
鄖(ヒラ)　和名　後撰(ゴセン)　長月の波ともりまれ日あなふよひくとく流を
てをとせて待られえちろぬうな女
宇治山の紅葉ふと見ても八也月のもと江(ヌキ)白地も見るゝゐでのあたり
年ふまつとも知る人ハあかしことなりをの津はなさむや
めも紫(ゴク)舟のうちひあかり浮きとつはたなかなかせと同前や
ふもとうちのはもれてまたさあかふおなとなしへきせうるせ
とひつてきらうをしらまかして何なるこにやすし給ふ

くる秋ことにそなふるのしるしとて柴舟のやうにはうち
まねかたとハ云ひ給ふぬや落葉ハむ甚(ジンヂ)色も柴舟をうらひ
今の世のこれさハわすれしく観念(クハンネン)し給ふなるへし
橋姫のんびくるて高瀬さしと棹乃雫り神そぬ色に出給
薫奇　橋姫とハ橋をまもる神と云う下に仙なる姫君
のるもろの搦み給し色僅(スコ)給ふ行んとくるて知る也舟
のんとももてもて手まくもさしは行かとハいつり姫君のんを
さ様ことふゆへり薫乃袖のぬれまさるとの給也
河　橋姫ハ宇治橋の神也
古　さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらん宇治の橋姫
宇治の橋姫と云古(フルキ)物語あり
宇治橋孝徳(カウトク)天皇大化二年沙門(シャモン)道登(ダウトウ)始造(ハジメテツクル)之云々
宇治橋姫橋下(ハシモト)に姫大明神とや神也離宮(リキウ)乃神この姫

神まうよひ給といふ説あり又一説住吉大明神乃宇
治の橋下(モト)にかよひ給ふと云さむしろに衣かたしき我ハ
住吉の明神乃御妻とかひ侍るへ今のことき
同歌詞云　うち出むれなむへとも夜かと猶(コ)き人をともふらん橋姫
なかめ給ふへんりとてとのめへりとくるせ給へり
是又よろへし
さむしろにいくきたるかりしてをて来り　寄(ヨセ)人の
内さや屋(サキ)時もそうあかたち今のあとかひ又為るくたに
とあるんや　河　さむしろ時為るくら手まつとにもふ禪皮(ヒ)
なそりと
源氏のそれの卿とおほろきあらんいそうしまたる也
姫君よりれ夜寄にせうくれ紙あとみくハ是かひるると
ともなくさうつしむとのりしや

さはうつゝハうる給ふハやうて　めやられ給ハさね一行し
こゝハいつもたく思形あらう可能との縁也
ゆしうるうちれ河も給ふり常下や神楽ゆしうちし舞
婦君返　舟人のわく蒔くにのかりうくる給ゆきしを
又給人え姫君の哀をとまろかして袖をぬらしとの縁也
姫君のかのあるまをてよあうきうく
めさへうきてやいとわりしあふうさ給へり
さもと棹れ常下よぬうて捕ゆへよあさへうれてもわかゆうふ
ますよめゆもく捕し行うりやんとまうもぬまても御車ありて
系りぬとくくさえうし安ゆも床とのあへきうきをとめしよ
せうく　葵の心也姫君の極衛ありれまうに可能とのん
とほめてとる也
うるりわうしせ給ふん程よりあるは系あへしあとの給ふ

父宮の寺よりうかゝひ給ふんと父又系給ひんとしを宿
出へり給也
ぬしたるの御我ともきこえしこのくよぬふうけ給へとうりに紙
わしつ給ゆなるかしよなゆをくへり わの人乃捕給ところよか
つきくわ月山そうろ　ぬしたる葵の事にとえ上宮
人り皆ぬきてつうえゆるかや
思ひしよるうもハくよれくまうさまて わ浄とうに行りしうつる御
あまひともまりひとにそひく　姫君きの流るを葵
の行の心也
行さひえあれぬうれせうりけるも也　姫君のとあるくの心也
安然銀じあるの心可宜へき
んよりくさひしう給　葵乃字法人系給るは隠るは心
みくわるうも給よ姫君のゆきとかん給てハいさくうる心れは

とかくかうとの儀也

此文なり行末さうたちてもわするを　京より薫の

姫君のもとへ遣(ヤリ)給ふとや

こゝろなきさしれはりしそるにつけて八宮さはくるひえり

御もとへつかはし給ひあそはせてかき給ふ　それかうあるの文

のさ由やをさうくちてもわしもやいふうる尾(ビ)もや

うちつきたるはさすやとはひなくとくめ給てのくりかわ

かくもくるしおもわきにあんくさえしくしとそれはうやう

とく今すこしみをもれまへともんやをとく物はしゆうは人をもらん

此山ふかきそて給らん日々すもうけ給ひとさて　文(モン)字(ジ)也

うちつきをなりかへしえりしめて奥給ふく楚(ソ)忽(ソウ)なりかとも給ふ

心よ露らんの様をとえやさてとくめかうとやあわれさとなく

此しとさそさるらもや

いかせりるまし薫れはかうひとつるをはらんなとそいとおもく

よくたうさ給へる

又宮清命ありたに来給て薫れあかの

いかをくりさしてと我山籠(ヤマコモリ)すまもくへり給らん時奉給てそ

かへとそるをんとや下の心を姫君すのこうもあはれう

しむの修と我さる事をんとや

大(タイ)近のそうあるへはうひさく丸わに人をうれまあかさとて

らをまとの給と丸ある人うさしむきをはくかさまひしあとはそ

まにわはしやうとて物はなよなるひようこやうれさのあま

あせうお物語　薫よりれは彼也

又乃日彼此寺すもなまり給山こもりもれそうをとも此はのわらし

あはいとなほそくるしうくんとさて　ひまもとと云すて

姫君の此々へとひそうさこゝ下来くせらるくやを見るへ

し又乃日とをたくそのそうはへつひ乃給の日あるへし

わりしまは世との事を終へりしんとおもひしかりてきぬまき
なとおほかりけるは彼にわくさすひとつそ語ふ行したな
まされともおもえすひとへくことによくさぬ事を哀れなとく
ひとくさとのほとつおもむかれたるにたちゆ語ふとの
ある人々はぬきもそてかくれんよ肉なりしおもろきの時ととも
えかくぬきろもおやの流そのあかくとゆりしくはなるく
魚能らりしきて
八丈山籠（コモリ）のこれ俤見れ布施（フセ）る
とまりて蕉の古白やかくて伊賀へかへりてや一七日ぬるの庵（セ）
掛（モツ）よ絹綿（ケンメン）（キヌワタ）なとするへし
身とおもくえん人の掛なれとも似はりそしくるぬ袖のうとんこ
とにかくあくま進めてらるて南ん在ろく而をうけるる心よま
うきてゐとやまとくことふるまうれきつとむくつけおゐまて
人のなまろく自ひとうしたすのくさやとゆへと而をそん人の

はなかりつかくえんきをくぬまてぬそわするとなるや
はまりに自人ハ折ともゆくてぬまかく人ぬ進とも自分の
あこたる身をいへるく人ぬとのんや
ゑんくむめ哀れの涼夜するとめやきくこめうしきとゆかし
魚見ん路　哀　蕉乃るもこめうしきみくはたやう
なるんや巨や
宮母と如くはせうそこ行りなよなと人くやすしさをはくらん
せさきとれも　又宮守は角やる（ルス）に蕉するもえ今存とてた
せなまるや
南みうきとはうたちてあそて南は路ちん己中くうらて行ら
む　文の祠や蕉ハ宮人（ニメヒト）をまれともきさう角しくはつひ
てハ中くよわしうくんとのんや
まんのはろ人にみなはんなんたあるを　世上のはるれ人の

やうかは薫ハそれとの御事や
あらん限りを見る一こととうち語りのめりてもうらさやうにて
心とめらんなとの給ふり　八宮我なからん後ハ姫君
たちさしのこし思ひよしの給ひけれバそのよろしにけさやう
に御身を思ひさまに心まとひ給ふらんとや
此みそうと色々さらにの心もをかしうにあはつよし
るいあとの給へるに　八宮ちに入る時暮ゆのからさし山
八いかゆるをさかまかりしまうらひとゆかるよ給ふとや
まうらへんとおもひて　八宮かう見まゆ君る時のわる
三の宮ハかやうにもてたらんゆからむとるさけかたんて
そわらしくるへえれと　見ハ白よりのるや　白
のか山里にあきしきんとさしかう給かりん

とましの給へるそやや
大かたにそこに給ふ姫君をくとをましくて心ろ
ささりちんとおもひしあのとやかれる
のことを白まよくてるなりてけんとうさむとや　薫姫君
夕霧に心の給ふくるはなかる物語のしくう
はかなりてうちの宮のするこもと白
ゑ薫もすゝ白まも宇治の姫君に我かうしう
め給ふのまに宇治へもかうし給ひとうさきも
かつし給ふ宮の中にあかし色よく給よ　弁　薫の白ゑ
宇治の姫君まて琴琵琶ひき給ふしるつへまき
せしとるをと白宮けかり給や
宮にとせちふけくとおほへたり
ゆりしと出給や　白ゑの心給く一段

されはまた心なしと見えていとゝ心ならぬこと人々いはん
はへる也　薫の心也白氏文集のことくせの事也
にくきの有さまなりけるとはかとり見るを語ハさるまし
白氏乃詞也
まろかしゝめしくれむやうらうと語
隔心(キヤクシン)して見も候はぬとうらうと語也　白ハ見きんり薫ハ
さうしてと心さうく　薫の詞也の語あらはれなれ
ことなりや
浮くんきへ入めるうしとさもん見をさ物語ける
薫の詞也兵部卿の宮にもて心強もちるえと見るを
何をぬとや
これ見るまてハ宇治の姫君達乃ことつけ薫乃の語也
物くいてもきむすれはある事まさきこまてやむつまてきせも

みな侍るなるをも心くんせさせたまやとおもひ語なれ
と　是ハ薫の卑下(ヒゲ)此詞也姫君達とほめて自身のひ
なし語也然るを薫のまゝやうたる事なくハ中也とさせそ
引こめてとく見まてともちくハあけまハ白氏文集なとにん
ハみかひあるへきまてくあしく心見きましんとや
ゆそう君よしせ語へたまやもそれほとしてもてうまかり
是ハ　匂宮なとれ折色くしきこ心なるくハうろくし
く宇治をハえわさう語つこと薫の卜竹也なやもそれ
ゆとくきやハ数　めしぬ事なとしそ好色(カウシヨク)のうてこと
おりよき物すて何まき兵部卿宮なとこそ玉蘭(ラン)乃御
事なれもありゆゑれせそとの心をゆり
いとくもうきぬつきさ兵部卿り名れ　数寄なる人き也
うちくろへはくわ侍りゆるかれ　ゆやうに而向てとひと

世ハなれたるもめでたきものに思すく侍るとみえしや
侍るらんに見えところ有ぬべし女の物もえしらずうち思ひ
侍るの　好色(カウシヨク)乃人の為(タメ)ハ女なとを思ひかく山里なとこれ
めでたれはもとめんとのつくりものとある人さし給そ
と慕の事語や
山里めつらしき所なんとのつくり侍る人々あるを
宇治よりきこしめすに河くにもこそ山里のことや
この中のしさまなるおもむきハ　宇治乃姫君達みえけるにや
いとまれなるひとしりもさしかくしちくしうそ侍るむ
めでたし侍らむひあるをはなれ侍て見えくとこしにそこそ侍る
さるをそれからの月かけしに給月影乃見ゆるさまをせしをハ
八宮みえけるにやそこにそうち語姫君達なれもさせるなる
ハ侍らしやさひあるなりしとやうちくしさ侍る

箏なしらへんとあり又琵琶にはきりてやうく
心もえすくしきさまなんとあるにや
まなんとそや
また琵琶さまなりしとやなや　手ならひの月影すりみへりちいさき琵琶(ビハ)
あさひ有様さるもちうらん　とそありけれはさらはやのちなるにやと比字や
侍らく琵琶侍る人さなとやなる語　姫君の琵琶なを
あるまりくそなとならんやの比おかくるやうにさ
てなる語なる人し
さそくいまめたちていとおもしく申侍るきれくまなる
ましたくのくなくなる琵琶なりくとゆかしう
世あはるのきるも有さるりなれぬ　白宮(ミヤ)それてたもや
比姫君のことをきこえ可能(シンビツ)人とある語その故なる薫ハ
宮(ヒトエ)人なをとは有へれ人まさらんとりさしとあるはなさ語

さほめ給ふやうハ騒(ヨウコウ)かるゝ事やとうちて給へましくさ給
てゆるしなきこと限(カギリ)なしとや
なか〳〵よろしきなき〳〵給へと人をとをくめ給へく
匂宮の詞也雅君の様体よく見給へと薫をとをくめ
給とや
隠ある御有様ともよるべきさ給ひともしなきまてこゝろ
をやとかしと推量し給ふ此君ハ　宇治の上﨟にてま
しまさをハ何事もちらく給ハさゆへしよろしくしなとも
宇治なる人こそとゝもに給まし〳〵まうすなとを問給ふ也
弄
大やう上﨟なるべし也　薫の心也
推しはかりて
そやうらかく推給ふまし世中にはかくめして思はのふ
給ふるやうなる事まてもあるとも隠しなくしらせ給はと

こゝろあらうかれをもえ人心ちをそめ聞え給ひ思ふまた〳〵人こゝろ
とあらん給ふへきやうなき給へ人も　薫の詞也されはこそ常
に執心(シウシン)をおもしなとふかうもかれをおもふにむものうきそめて
后心のむさとも千さう人はかれをも推量しなきる人々しぬこと
やう御有様とかの給也なかなかりことをはけしまし〳〵
といひし上に此君のさまに執(ギ)く后心の有様なれだうつましき
との儀也
いそ何事ことくし　匂宮の詞也おとろかしこきやうは
推そろしきやうことくしたる也薫の后心の詞をといひき
き果給ふとんとや
君いかゝとろかしくおもひしうきこと見えてあるしの那にて
まうひ給ふ　聖詞(ヒジリコトバ)也
心のうちのはかれ思ふ人の程のあしもしりちあとのたよう

ちおとろへさまてその哀なるにはかなしとかんずることもみえぬや

ましかはなくいつるとも命ふたゝび心あるもとまりけりけるにや

草のかんも古人も千年也柏木は千とせをかのめしけることと

の哀なれと嵯峨天皇の御時にかしこきとかんするも菊も

柏木は千とせ代々をしけんと思ふ也

十月よりて又六日のおほひにうちへまいりて行あしこをとこ

をはこるはかうせんせめやとゆけ行へく河辺と　前付

是の宇治へよりのほる始ハ出はなまり付はさうるは網代と

いはんせんとくてかや

行くそれをもしはあしおもふをまてはしる後を見さらんと

さもなして行てかうかた　かゝる命をいへる出れ命ハ

まうれさまのくわるを網代のひをとよ死ありて草の

後也さやうれはかれしるまんとてめでとそ思ふとて行也

また蜉蝣といふ虫ハ朝に生して夕に死をしのまりさ程を

世中はかなきことにたとへていへる也氷魚とも書く蜉蝣

とのふみを見るにそ皆人のへなれはいへるなるへし

河

蜉蝣 一云常は夕をもへとゞまるも

蟪 同 朝生暮死虫也　西因法師ハやうそ氷魚とかきを

また常にかやうに言ふ始ある無念のことも蜉蝣ハ朝に生し

て夕をまたぬと云常は喩の出也されと氷魚の名に

よるをのひされはそ魚あることされと氷魚はかり

みえハ何れ魚の背へきたえ物語をもしらすハとも

見しゆるれかるといへとも何れへし

郭璞詩　借問蜉蝣輩 寧知亀鶴年 一云

何かる車にかくかとうちもしよ　草の宇治へゆくし

云術ありて見るも行とも也　弁　若ハ女あとのことを書らるやう

さしぬきなどきてことたらしめさ給へり　平緒（ヘイヲ）のこと
うたるさ夜なとこそりお花の洞よりくろくにといへるも
河
謙虚良（カトリヲナヲニ）　花　黄ハ云々（ウネウ）とも虚良よ平緒と見ゆへし
於
かとらとハ平緒夏（アリ）くさるへくしまて
弄
問云黄ハ云卿とも慈（チヨウ）もとも花ありにとそとされ
うやうなるへいつかやうたる時よるもるぞや播ゆまをみるに
黄中ね花をとあり十九つるとや一巻かとうとハ平緒と
云也唐上人ハ花用（ス）之文云々ハ光（ワウ）花茂色更衣（カウイ）の時花之文
服（フク）花なとと見之（ニレウ）
宮まちろふひ行て所よ律をたる　八文花黄のわくると
給と待つきて福（ニレウ）花し給也
御あるしふとわりうちすうし給ふ廷ぬれと故ゆるあるう
らくてさらにくうかんさし給ふる　宇治ノおさむ（サンタン）しめ

法とてあかたまるも
かくともの子つるをとと　おりとひのこし給へる法文の
奥儀（アフギ）なともあるへし
行さるをとさくし給ふる秘義ありといへるを行おもまろしま
をは風のいとおもしろにこれをいちりうふとともの
こさあとおさまりてもまたふくうなのあそこうし
うけさなり
口も此義也　阿闍（アジヤ）梨（リ）をと云ふやうしおうりをやはら山寺よ
名也とて　清涼（セイリヤウ）下やきと法奥儀（アフギ）也　和　福（ロギ）系をさせよ
みなくちくるあかりぬくへんと思ひ給り　黄の心も
かりしまのくゆんとひ出しまきて　おの暁（アカツキ）くれるも
さんの私義あることのはりて　はくしまりてまか　おまひめ
おなら此引給をも学語しきらふと下（ゲ）よまちてまて

の琴ハ面白ことぞなんの給ひ出るとや　弄　八宮のきんハ
ことなりしゆへなるをまつと薫の給ひ出るとやこ
されのたびひきまたにさとはされ給ふしかるをほのふめづらしき給
かね一二ちうあるなりしのこゑもあんたるくに　薫の詞
いと心ゆかしうかけをとひの給つるなるをとゞめてし給ふ
いふかしう　わかはしこゑ（心もとなし）をのんや
ことともあるをとひきてくしな　又宮の詞也
若宮のしことともみなよほ道にあかあんとの給へと　琴と
るすやのほとくなり
きんとるをよまてにとつきたなく加またりや　宮の琴と
久しくわきてハさのハうハくしきとのん也
あるへきを候なの給にてきてあんとひかてくるへのもけれ
とてひハ免してし　薫の申給ふそまたつきて宮も何
そもさんとや
まくうたてくの給ふとるまてあしく給ふ
薫の琵琶引給へとそくの給ふとや
さらにほのかた此はしたなし物ともあたら給つまをかつけ
薫の詞也　是暁（アカツキ）姫君達の何ぞのしたるに薫の引給ふ
あまへきるすみとおもしむやや
御ことの心ゆかしくはやとして給へしうとそ心まくをも
きたてて給へは
承とて姫君の時も申しとや今ねね（ワカ）門くされも文り
生（シャウ）給琴のよくある琴みくね柱（セウ）ね移なす
その時のひくおり給へくもあく給て後くハ姫君の上
まうふく宵しまとの後也此上卑（ヒ）下（ゲ）也
いそおふさう卯やあるちんくさまの後それてあとハうかくよ
まうハ　宮の詞也薫の耳とくめ給御の琵琶のあはて

ハかなしわかれんとの詞也
あくまてハほそりてんおもましなほ流しとあらんやそてさんなさ
あらし行平なりと哀り也けるし　是も宮乃卑下し
歌詞也
かくて此頃の松風のをとてちやもさなるへしいと冬とくしをたに
おほめききゝて心へはらてひとりくる事はくやめ給川
宮乃此琴ハ松風ろきに松風をきゝて心もさやむ也
拾　松風ハ和琴と云ことを
ことわねまみえの松風かあましいつまをとよりえくへそめらん
む　後撰集此歌源養父乃琴をきゝて
入しの歌乃文行ましに言此歌の意風あくかやそこさく
はかなきにおほくなくてわかくはのめくりぬれとのこ
そ心しあるにやときくわり侍る　八文の詞也 姫君
の琴此こととの詞也たるにやと八月なる事やゆ附也

あなとの詞也
ちくめてあとも行きて色さしう此まありや山よまりをそ
とのくうきなふかをへあるは　一説 猶此は引給へは宮の
んとかくめても思へ行かで久しくなきありことや
川波ちうりやうちあそはらん　姫君の心よまりを
て箏瑟(クンゲン)ありとも思ひ給はがた河波ちろあひて
ふありておほえるにやとの言乃詞也
ろ有らのうつゝにもさりるをれそうし有とも思まつもしと
あんお給との給とて　不論(ナウロン) 箏瑟あとれ用ゐはつまさ
楠そあるもおもしとの縁也　弄 用ゐまへりなるをハ何ら
しかもや
うれなし行へとわするにやけうへと　是も宮の詞也
文宮めきらと姫君のくへの語やとくはらう此琴のろや

心ひとつにありしひとつもと御心にしみぬるにも猶後にと
かくさむらんとひたすらまかりみちまかせたはたゝひとつそく
のうへ宮の給へと　姫君の居るゝや又暁(アカツキ)におもひもよふさら
しに薫の宮の給さんとうつらはまさて引給ゝぬや
とく宮ゝをまかせくや給ひぬめれと
をまかりひ給也　姫君引給ひそ
いとにわしうお帰也　薫礼也
そのほとてふるもかくわやしうまれゝぬさひかりふかくまもくは
ありさまとも思ひの御ほとれぬるも事とうつらうお帰い
たり　八宮のんもとうしうと申ん也四月姫君達の孫
あともはなれ給ひはたへるまたなくおもしまはりと御父宮
の咲(セウシ)たらて待ん八薫をおもをおもしめもとのんとをり
しうなずしうてま給也世上みちひかりや

人のまたいうふさしやそくとまくせとものわせとしとも
らぬ身礼のこゝろをもくなさたさまうたゆくまらとせきん合
八宮の御也 姫君達をとだくへりさしとそくて給へたち
御身ハのこゝろまくなし 姫君達ハ給ま心御なるをなれ
八薫とゝあのゝ給とや
おちわつ達らくはらんところれのことそきに世をとも礼きん
こまれはさしなりのれとうちかゝるひ給へも　さうれ
ともこ文をうつらは事ともこゝ同んすやおちとまる事
身をとつらに御さんとのん也
心かるしう見まう給　薫の八宮礼の給ゝをとさての
御也
わさと御うしろたちそくしさきもちふ侍らもかこともう
とくしうをもおほしめさまんとなん　薫礼返答也

思給ふ心ありしもあはれなる侍らん命しれ侍らハ　そなたさまへ
ほとうとくしきを打ほゝゑみて八薫ハ甲斐(カヒ)くしく許(キョ)あるへき
白とも涯分(ガイブン)なき?んやさんとも
ひとをともかくらふかてゆかしさをてんさまつ代たりへ侍ほ
白あんなきとや給へて　薫ハ命のあるかたの只今一期(ゴジ)なると
ともかま所在(ジョサイ)?有まつかなてう臨終(リンジュウ)?任しへゆくもあふとぞを
まうへしとや
いとう給しかなさくむはしの給ふさそてあらつぶかくこの天女中将
ねこなさひし給ふかに　宮九ヶ網也
あれ老人めし出て行ひ給へり　弁の尼とめして薫九
あひ給也
此君の浮ろこみくさゝいま給弁乃君とそ出ひなる年
八十年にあまりぬほとなれと　弁の尼のことを弱き

故網也大君乃おもしやくなるへし
こやひろふゆへあるあそひしてこの末を宮の御
流りさまをうゆへあるへとも　弁尼ハ風
古権大納言これ君の世とくとにまのつきひつやまひつきさう
なく物給ありし有様を宮のし出くなくさとうくきなるあり
柏木此ありて弁尼かたり出くなくも
あふ我人のまへときこえんことに哀なる人なるあはれとくもと
まして今年はかほつれくゆかしう　薫ハ柏木九子なれ
なも
いつなりさんことのもし殊ふと侍とをあとも此ことをもらさての
に志る君給へと頼んしけるうちをすやうく長九やくに哀なる給
むかしの物語を御つゝみて宮つきはりんとおかれはりし給
まくまくめてくらうまあり　薫乃親ならとのことをきゝし

くちをしう給ふ事ハ源氏とうちたまふの心也

ちかくをかく我女の心をちたる人ものいひ給へりとうらみつ

らうたきもあつしうちも打ほゆることとれまさらに　薫の詞也

心をつけたる人とハ弁の尼の事也

打ゝるひはるすりやうひやうをもけしん年はうけても常世を

よそちり出給との給へと　弁まうしあはせるとも人を

故人の有りとも薫をもちとをきり給へとも一句ゝまうく

ぬやうまの給ふも也おの詞りまつりしうをもれあるハ薫の

御事もいさ由来とあきまつりしきこん也

小侍従と弁ともあらして又ある人侍らひとことくとも

為ことゝんばうちまひのひ侍しかと　弁か詞也いさかうりを

のまつく又とある人をあるまし也と也

かく物をあれく数ある数あれとも侍まてと　弁か果

の詞也

よ給ひるらの法のきたにつきなそそろして侍しかいとのつら

柏のうしおさそとも見ん哉りそめしに

弁もち心あし人畫師の行ひとも多く家も思ひしとや　源氏とハ柏木也

御心よるとかおまいりて打いひある時く　柏木の心いひ

りいやまり給とときくとも

そんなるの中にあんたまさろれけ世ここれたまひ給

しかさいろいくさ逢ハくらしをさのくきたに　柏木

より女三宮への文ちか小侍従と弁とありて見侍べき

つゝしとやいとこゝちも

今そのとちあふなるを給くいさこの給ひまゐる行給し

と　柏木除服の時弁かきこえそし給也

うちあまはとこそあるくいかきくさひ給へまろらつゆゐし

てくハさうしめしはさらへさせえらくしらぬ御ものつれて
みも思ひ給へはるほと　弁 おとゞの柏木衛門督（ヱイモンノカミ）はなとおつ
るをきてハとおほえ泣なから心もとなきことのミ有しとや
我ハ母にわかれしまゝ事とおほえぬ給へるのミぬる涙かん
せきもへ言柏木も侍り今ハ其かたハやまひともふそ給ふん
そやうに薫不思議（フリヨ）にあひ侍るをも連（レン）に仏も念（ネン）じ
まうしはるとてひまはるとや
かく柏木さるとわかき母君打もて給ふそ打ち坊やう
をこそいひとうらめしく言給ふ事を
弁 さうて此きさき侍ると藤袴てと之へもやさきもて
てんかもひしとやされとも薫にあひ侍る時とよ
くそとひをとや
此文やうらみも時くはのめをも給ふとまうらふてなりてし

かえもとし手をのとくく承打きとまやと
八宮へ薫の時くかよひ給へ八宮はうせてもおはしけれど侍なりしとや
念しはるちらしんてまうしてきてなん　進（シン）て行（ギヤウ）つる
中納言（ナカウ）出来たるとの詞や或卿（スイ）またうまうしてきてとあり
まんなる弁か薫のそたくへよるも来まいるらんや佐不用とく
弁 中納言出来やうと
さんふをハ此世のこととに侍らしとなくくこ母かにむすまい給
ふる程のこともよく拙はしつゝ出の也
何るへしとの弁か詞や　ちゝ君の宿縁（シユクエン）まて
むすめう此給しさらなるに
すこに何しへるやうそやまひつきて縦みなくれ侍あしう
えいとくもを給へまいりと　柏木此滝（タキ）給しるとや
弁か母ハ柏木乃めのとなるそをまいも
柏木乃くまい給ふこと我泣（ナキ）くやうそてうせたりしとや

藤衣たちかさねしゆなし侍へし給へり

柏木は父をめやし又母乃服(ブク)にも藤衣をきかさねたるなり

かなしとかや

河　六帖　一首へ
ふち衣はつるゝ糸は君こふる涙の玉のをとやなるらん

同
藤衣うきぬるをひねもすひやれぬもをきをもやすとも泣けれ

同
河ゝむの　年ぬるさへも　冬しかるし　花の宮

山さむくこそ　風もさかりぬ　色ちくさも　かさしひ盡

あさ露に　拾遺(シウイ)　古歌　源順(ミナモトノシタガフ)　　藤衣(フヂコロモ)

年比よろしぬ人の身をはもたりなれり　　弁かわかりし

とかくありし人のこゝをとゝろう

人となりてこちてありしは海のかたてまてとりかへしてまかりにし

は京にとゝまり何とたのみてそのへもうしこなくまうち侍るは

のち　まゐりきこちすへは弁をも男にたのみてとやあるか

かくて上下しとも大殿のおほ殿の君たちなる人ゝしうへ人ゝも

みてうきしなや

十とせあまりの子々とかくなん何しぬ世の心ちしてまうかきのかけり

来らんしと　　西の宮の十年何事の前のかけりて　八宮すまへ

みとせ六とせを有けしや

この宮はちかくなりにつけてもいまはうちとまかりかよひて一人給へりうそ

今はかくまうしぬへきさ海をも給ひぬを　　八宮ゝまゝおほやけ

弁外戚(ゲシャク)乃ゆかりと弁が居はかんしたり

冷泉院乃女御殿の御かたにさふらひしかはむかしの中たまなりし

わかきにつくましき人々してとかくもわたりくれ侍ると給

てえらしふて侍りて　　致仕大臣乃息女弘徽殿なるなり

柏木は妹なれは弁はそのたよりをも母は来る人

さとりとあれとも何とやらんおとしくされたるさまし出

ぬとやらしたる事ハ其の山を歴て此所へもまかりたまへる
よまれしをぬとの濁也
三山のくれのかたち木にたとへて侍なり小町はいかにかう
若ありけんその後この日は汲々御人へ云はれける
なくありけるに常なるもこの世にかはらん人にわたる命
をうかしくも絶へてこそさすらひゆくハ侍らぬと申也
戒とに
古
くちらそ深山のくれの杉木ひとつ花よ誰さいかなあらん
是ハの歌そてぬすめハむかし物語ハ情さもあるかなん
何ぬ文人さるらん西もなく所まて京の人小町とのひとくらん
行のくに都住ゆるは　常に思へるを絶へ人も例とへ
此りさまて小町が歌也　一よしいハ　業乃翅也
是古きより歌もしはとまやかへくにむかとやさてうせにき

と云ん事くの後年にハめんなくハ　業乃父すでに此時身まかりし
小町姫のうせはしと從母は先し行かゞ飢(ニカニ)わり胸(ムネ)をたゝて
うせにし由曾行ハしと也
情に小町がわれは人くたりそこあとの給
弁がわらしぞよぞ栖木とまてとの親といへるとを志て
情にわもうしんと也　業の小絶也
きやうにもしまわ何の事をみるはいとも又ひくさ此と袋
まかきたるをりは身をなき給　さらやうさハほそくきまかる
くめるにさまや目くともやとて友古(ホゴ)あるへしとひくのさ
とハ古臭(フルクサキ)なるへし　河細許　逸仙家
作まん御くらしあやを行人　業乃わらく此縁へして
燒(ヤキステ)棄行人と弁の中也　栖木陌の時女三ら女へゆされける
おり女三乃御おみくしよくらしあらをと行へとや

されなはいくたひもうれしきなりたまさやの給ひきては
又ようりあはめて給ふもそすまてしもかも小侍従は又はひ見ん
はらんはいらくに　柏木は陰徳の時乃給ふとはいとと荒
弁尼のかゝるも
はさうたはらん入来らせんとおもふ給へしをやりてかく返事は
しを　弁の小侍従りあひさらん時女三宮は御まへ来らう
せまとやらんやおもひしつるたに小侍従やりてうきたりしらも
やくくしてこたいはいかしもうれしうあんたかかるかはこと西
女三宮へ来らせんとおもひしは小侍従うせすまいらんと来らう
せもして今こそ弁かまちたるはまくくしは云汝は
元わらむや心のもまや
はまなくてこれなくいはなり　荒の弁の来らせ給ふ
柏木は又かまようり給ひんいそつしうるへさるまなれと

はまなくをそてあしてあくし給へはさくと念也
みやうれある人々とまれのうちうやわやしまとのきま心うれ
いさひつくんとくれしをはけきと在くとちうしさねよりしをと
ちうひつろさをやとまいとおひとらま給
弁 いやうあるをむ女あらは必人乃こまあいよ成もいひ出る紙　荒の心也
なれはもしもいひちしうろうとといひ給へともちうなと
あとさそくはとたちなるしをとせん梅はさやまみとなき
まやとらさ給ありしはとうあはあるれ給ふも
許のうこえもひあとまかり給ふ　荒の御給給ひたる也
きのうるいとさ日ありしを　さらへ来らおれてとさ乃日と
いふ後や御補恙り彌給しにまるそてや　河 聰日
さればうちたれ柏つきもあきぬらん　弁 はらしとあ哉日は
大うされくも出へせきそ花へもひそても柏忌あとかきて

怯なり

院の女一乃宮たちにも給はさりしに御ふみかよはしけんは末の人々たれ

くさくいと面なくかへて文かよはし奉るくして山のりみちはら

ぬさる文のまゐらする人にさもあらし　是ハ冷泉院の女一宮母ハ弘徽

殿大后の心も光弘徽殿の女御也又この女ハとよ月

と云るを薫の八宮ハ中務卿也

出し給ふ　八宮へ薫乃なりと面うひの給也

かく志んくたちよりせ給ふひろさにやさしれつけるもさとし

物あきらむつ心ちしく　なんとも給ふひ出し給ふ乃色

里給ひさくまけ仕かへるを三給へる　八宮の祠也志ハ

志そハ柏木れんも哀とも云ふまよくかやひたる祠也可

此味之

つゝ乃事せん事ありとぬのそくミという事しきうへてはうかなかり

はかなくしてくちれつる袋のひたるに　まことに秋花

袋也　河　唐浮線綾ことゝけて織たる綾とある

其袋の人にいつも上文字をとぶるゝ也

この乃はなれれかうはかなたり何も面をも打そへしすぞはし給

とくれのことにくすまきさくにかへるひろう　柏木れ名也云

哀の人ハ哀ねとくびして郷かし給ふれハくらふなや

はる文のくりことのつむ川そ行れ　女三宮よりとれ返也

又つ言のわりた也

されとうれはまおそて　是ハ柏木の手給也女三宮の給

かくへ奉らせんとて云給へとも気もなりそのくしを

こゝ給文参らへしいへハとの祠を女三宮の御たりして

ハ柏木れ文の有よし也

やまひハおもりくきるとに参りかへるに文御の手を出さん

とかくはかなき紙　柏木の文言也ゆかしう見ゆるを
とは女三宮懐姙のさまをかくしたりてとく女三
宮尼になり給ひぬとぞ云り
ゆかしうもなりハそのひききえも消えなんもとかかりて折ゆし
まゝにんのかさなりけしきなるをみちれなふなる文云
枝よ情なくと　弄　柏木今はの際なれとも女三宮の御
うしろめたさを思ひなるやさ　女三宮懐姙のなりけむ
おやしたる人の跡のやうになきて　病中なれは紛ゆ
書きしをそり　河　蒼頡(ソウケツ)か跡をみるかたしめくる文
字を作りしや
ありまへりし世をそむき君よりもとやうにかわるとおもへき
柏木云　女三宮の尼なりなく若代をそむき給ふへ
うかりしなと大かれとも云女三宮を柏木かよそに見ん

てなくさめてそのわたりなる雅(ミヤヒ)なれとの儀也
又これハめつらしく字体ハなちさ筆のほとりをしろめてう
ち見給ふかくさへありけれは　たとしへ文のもし　書也
二葉とハ薫誕生(タンジヤウ)にたとへ給へりしろめたなくくは
あされとくいろ面(オモテ)ハ源氏の方よりゆつりたまへん可
錯そくとさそて行きん事とおもひなくハうたれしと
いつりありとへいへいかさしの心也
命あらむそれとも見まほしく人まち顔なる松の岩根
同前　柏木我命惜しみ給ひて薫ハ親ととも御覧し
又ちと見給へむこやとも人まちかほなる岩根よみの
しとへの宮なれく女三宮のなきのやうに見ゆるとかの
岩根の松ひとの心とは薫のことを申しているや
出給しかのようにいとみなるもいくつして侍従の君なとう

これハ虫つきたりきといふよむしハそれもえんくにありてかれ
めいろうひるさくなり
食書虫名之 河 蟫 同 又白魚 和名
衣魚 同 紙魚 同 蛀蠹落書擲 律文
杜陵詩 積蠹鄧獄鮑生蛀白氏文集之
花 白氏文集十四 紅牋白紙両三束 半是君詩半是玄経
等不展縁身病 今日有看生蠹魚之
行とはさくしもたるつさクにかきしんでもしろかねとのきと
もれぬ海くしとふさこのたかつ紙及ん給つた
かくはゝるこれとかくとあかきと有ぬへし長きにも世やうへやあらん
あまおもひかるとたちまちしとうしろめたうつゝとおもひきこ
ととをありつるゝ御ふ文わらんやとんひとかりつゝく
こあおもとのりさそひらうちへ宮らんとおほしつるをいそ
えまれ おほす赤死の我ありてハ文ともうちく

むとハひし玉鈎とよりてこくにかなみとえうらむひしやう
まちりてなうしろあたく柏木のなまめいてわしなとも
宮の御まへよ参り給へまもいひとおふ御もをもすくりゝやうかみ
さまし給て給ふのと給ふあをえもちひくいてうくし給へり
女三宮へ薫の参給へもりやうにかほにもたなく給とよ
らめつる紙かくし給と世御子たすれとも薫ハ横紺
まつしなく人あれたる也
行くハ志るもにあるもとを志しま玉なまゝん御とわもこゆそよ
ろ佛りよひの給へり 薫ハ柏木の子と我も志りたる
かりとも母宮よいさくかも志しま玉なましと御よにあるてい
給や